

来談者中心療法における夢の一考察

田 畑 治

I 問題と目的

カウンセリングや心理療法において、まま出くわす事象にクライアントが表象する彼または彼女の夢がある。

夢は、本来睡眠中に生ずる自覚的体験のうちで、明瞭な感覚性心像をもつものであるが、夢と睡眠中の思考体験とのあいだには種々の移行があり、映像が明瞭でない場合には、体験のなかで自己が覚醒時の自己と別の存在としてあらわれるものが夢であり、覚醒時との自己同一性が維持されている場合の思考とは区別される（大熊，1975）。近年の神経生理学的研究によって、夢は主として特殊な睡眠期（＝REM睡眠期）に出現することが判明してきている。精神医学領域でも睡眠と夢との精神生理学的研究が、REM期覚醒法によって行なわれてきている（大熊・織田，1971）。

心理臨床場面で出くわす夢は、クライアント自身の欲求、願望、感情、思考、ファンタジー、隠された態度などだけでなく、実存そのものを表象するものとして重要な素材や手がかりを与えてくれる。とりわけ、クライアントの外的問題や行動よりも、内的体験、精神生活、さらには生き方が問題になるカウンセリングや心理療法の場面では、夢は重要な素材や手がかりを提供してくれるし、クライアントに心理的援助をしようとする治療者の心理治療関係の質をも決定することになる（小椋，1976；田畑 1976）。

“夢は無意識への王道である”と述べたS. Freudは、夢を患者の精神分析における不可欠な素材としてきた。彼の『夢の解釈』（Die Traumdeutung）は、最初の体系的叙述として、臨床領域では、こんにち広く知られている。また鑪（1976）は、自己の被分析体験を通して、はっきりと夢が“生きている”ことを感じ、われわれが自分の無意識に近づき、馴染むものとしてはっきりと夢のあることを知ったと記し、夢の臨床的利用のために、その豊かな臨床的体験を基礎として、いくつかの代表的な夢分析の技法を展望している。また、最近、臨床心理学、とりわけ心理療法研究の領域でも、夢に関する研究は数多くなされるようになってきている。河合（1967）はユング派の分析における技法と理論と題して、一学校恐怖症児（中学2年）の夢分析を行ない、患者の連想を大切

にすることを強調しながら、夢内容をそれと類似の神話やおとぎ話などのもつテーマのもつ意味を助けとして夢内容の意味を豊かにし、かつ明らかにしていく技法を重要視している。さらに元型的布置、自立性の問題に言及しながら、症児の治療像、他学派との関係を総合的に考察している。また鑪（1968）は、夢の形成作業に関する精神分析的仮説を検討するために、FreudがId分析をおこなう理論的根拠にしたTopographicalな観点と自我心理学の発展にともなって展開してきているStructuralな観点とを総合的にとりあげて考察を加えている。

1970年代に入って、これらの研究者による分析的あるいは精神分析的な立場での、夢に関する研究は、年々増加の一途をたどってきている（河合，1971，1975a，1975b，1976，西村 1974，1975，1976；鑪，1970a，1970b 1971，1973）。1974年には、日本心理学会第38回大会において、初めて「夢分析の理論と臨床」のシンポジウムが開かれた（鑪・河合・前田・荻野・水島，1974）。その他にも組織的あるいは非組織的に夢を心理療法場面で扱った研究は、毎年いくつかがみられるようになった（田畑，1975，1976b；増井 1975；藤原 1976；住本 1976；前田・林・滝 1976；門前 1976；小椋 1976）

ところで、患者の夢の分析を行なうためには、まず分析家の基礎資格として、個人分析（教育分析）を受けなければならない。夢の分析や夢の解釈を行なうためには、心理療法としての精神分析の訓練の一部に義務づけられている。ここには“専門家モデル”，“医師モデル”が一貫して主張されている。

しかし“非専門家モデル”，“非医師モデル”（村山，1977）を基盤にして発展してきた来談者中心療法において、クライアント自らが表明する現象的世界、とりわけ本稿で問題にしようとしている夢の体験的世界への接近はどのようになされてきたのであろうか。

こんにち、C. R. Rogersによって1940年代に創唱された来談者中心療法は、その治療理論の発展において、“非指示的療法”（1940～1950年），“クライアント中心療法”（1950～1957年），“体験過程療法”（1957年以降）の3段階に区分されている。特に“体験過程療法”の特徴（Gendlin, E. T., 1973；村山，1977）はRogers, Gendlin, Kiesler, Truaxらが精神分裂病者

や正常者の心理療法に取り組んだところから、治療的方法に大きな変化が起きてきたことにある。

その特徴は、つぎの4点に集約できる。①非指示的療法、クライエント中心療法では、非効果的だとされていた治療者の介入的活動（たとえば治療者の感情や意見を述べること、質問をすることなど）が治療者の広範な活動の中に含まれるようになったこと。②治療者の態度（つまり自己一致、無条件の積極的関心、共感的理解）が、効果的な治療関係の確立のために前提条件として要請されること。③弾力的な治療者の活動は、体験過程の現象の中で明確にされる。治療者の応答は、相互作用における“いま、ここで”（here and now）の体験過程に基づくものであり、それはクライエントの主観的過程に向けられる。このように体験過程に焦点を合わせることで、治療者は自分の瞬間的感情の多くを、時にはクライエントに対して表現することになること。④体験過程療法は、治療者とクライエントの体験過程におくが、クライエントをひとりの全体的に統合された生物的社会的人間としてみること、などである。

このように本療法を特徴づけてみてくると、クライエントが自発的に（あるいは暗々裡に）表明する夢への、治療者の感受性豊かな受けとめは、クライエントの内的体験過程をより深淵からとりあげ、かつ明確化させるようにできるであろう。そしてそのことができるということは、ひいてはその心理療法の質や進展と密接に重なってくるであろう。

従来、体験過程療法を含めた総称概念としての来談者中心療法では、上述のように貴重な夢は、とかく断片的にしかとりあげられなかったり、散発的な話題としてしかとりあげられなかったきらいがある。これは、上述のように、治療者－クライエントの相互作用のなかでの、両者の内的体験過程への気づきと明確な把握が希薄であるところに起因しているからであったと考えられる。

本稿の目的は、かかる問題意識から、つぎのような3点を吟味することである。

①クライエントの表象する内的体験過程としての夢に焦点づけて、治療者がその状況でどのように取り組んでいき、かつ治療者の内的体験過程にどのように定位づけていくかを、各治療事例に即して面接状況を忠実に記述すること。

②夢が表象される状況と他の話題が表明される状況との関連を記述しながら、全体の治療過程の流れを一つのみとまとまりとして考察すること。

③治療者－クライエントの治療関係の質を、いくつかの観点から総合的に考察し、今後の治療実践への手がかりや示唆を提供すること。

II 研究方法

1. 事例：事例1——K. I. 14歳、男子、中学2年。
事例2——I. K. 28歳、女子、大学4年。前者は5回（1971年3月5日～4月30日まで）、後者は15回（某年6月12日～翌年2月12日まで）、それぞれ治療面接を行ない、終結しているもの。

2. 本研究における諸資料：1）面接記録の概要——各回の面接内容のレジメと治療者が受けとめた印象の記録。2）夢が表明される回の面接逐語記録。3）手紙—クライエントと治療者が交信した手紙とハガキ。

3. 面接場所と面接日時：筆者の研究室。面接室用長イス、面接机、面接用ソファーが備えられている。面接時間は、原則として週一回45分とした。対面法。

4. 治療者：筆者。

III 結果

以下に、事例1、事例2ごとに、本研究の目的①、目的②を中心に、それぞれの〈来談契機〉、〈主訴〉、〈治療開始前の治療者の体験過程〉、〈治療面接経過〉、〈各回の治療者の印象〉、〈夢の表明〉を記述する。

事例1 K. I.

〈来談の契機〉 担任教師に紹介されて来室。担任教師からの事前の情報では、本人が小学4年頃から、家庭での両親の不仲にさらされていること。中学1年のとき、クラスの会長に選ばれ、思うようにならずノイローゼ状態になったこと。夜中に無断で家を出て、某市内をうろついていたことがあること。下校時、ひとりで海岸を歩いたり、広場にひっくり返って青空を飽くことなくみていることがあったこと。本人は、かつて自殺企図をしたことがあったこと（未遂に終わっている。ちなみに本人の家業は薬局店を経営している。）などであった。

〈主訴〉「家庭内の（主に父と母による）不和が多くなり、私自身一人っ子なもので、別に何とした意見もできぬうちに、その中にまきこまれてしまい、今の自分のあり方とでもいうものがまったくわからなくなってきて、何も手につかない状態なんです。だから何か助言（とでもいうものを）してもらいたと思います」。

〈家族構成〉父42歳、薬局経営者、母41歳、祖父71歳、薬局支店経営、祖母68歳、薬局支店経営、本人。計5人家族。父は2、3歳頃養子にもらわれた。祖父母に子どもがなく、前妻は離婚させられた。

〈治療者の面接開始前のクライエントに対する受けとめ〉事前に学校長→担任教師から電話で紹介をうけた際に、果してこのクライエントがかかえている問題（家庭

の両親の不和の問題)は、治療者の立ち入ることのできる問題であるかどうかはなほだ疑問であった。むしろ家庭の不和そして離婚問題は、家庭裁判所に調停を依頼すべきことであろうと考えていた。しかし本人自身が、家庭内のいざこざにまきこまれ、情緒的混乱に陥っている状況には、十分に話を伺い、援助していくことは可能である。ともかく、この点に見分けをつけるべく面接に応じようとした。

<面接経過>

初回面接(1971年3月5日):クライアントは家庭内、とくに両親間の不和が多くなって、自分自身どうすることもできないままに、その渦中にまき込まれてしまっていることを述べた。そして彼は次のようなことについて語った。このような不和は自分が小学高学年の頃からはじまったこと。近頃では母親は他県へ就職の途中で当分帰ってきそうにないこと。父親も母親がそうするのを望んでいる。自分は瀬戸ぎわに立たされた感じになる。父親は、それでいて、店の経営状態がきわめて悪いために、怒りっぽくなりハッ当たりをする。自分は家の中にいるとしめつけられる気持になる。学校にいても何だか家のことが気がかりになる。それでも、まだ学校にいる方がましである。両親の不和が、すべてのことに波及し、学校にいても懐疑的になる。何もかも信じられなくなる。学校でクラス内の討論をやっても、ヤケっぱちになる。自分は「いつまでも眠ってみたい」。生まれて14年間、何をしてきたのかと思うと情なくなる。すべてがつまらなくなり、一度自殺しかけたことがある。自分が死ねば両親もわかってくれると思って、置手紙を出かけたが、死ぬ勇気がなかった。一人ぼっちの気持が強い。すべての束縛から逃げ出したい。誰もいない海岸を歩いたり、川の堤防に寝ころんで、青空をいつまでもながめたりしている。自分は笑ったことがない。もし笑えたとしても、それは人をあざ笑う気持からである。夜一人で涙が枯れるまで泣くこともある。しかしまだ自分の感情のはけ口がない。夜、怖いような気持の悪い色つきの夢をみる。眠るのがとても苦痛である。

<夢の表明>(C……クライアント, T……カウンセラー; 番号は発言番号)

C67 ハー《問》 まあ『夢判断』って本があるでしょ(ウム)一寸まあ関係ない話になりますけど(フム)『夢判断』って本で、色々夢判断するとね(フム)きまって家庭内とかね、何とかいうて、欲求不満、怖れとかね(フーン) そういったものがでてくるわけですよ。

T68 あのー『夢判断』って、本で読まれているわけね(ハイ)何か夢ごらんになります?

C68 “カラー”ですな、ハハハッ《笑いながら》(T: えっ?) 色つ

きの、毎回みちゃう

T69 色つきのみちゃう、ほうほう(よくみるんですけどもね)面白いね。私も夢に多少関心があるのだけれど、どんな夢みます?

C69 ただね、落っこっていくの(はーそうー)落っこって行くと“まっ赤”に炎が燃えているっていうのがね(フムフム) そういったのとか、たとえばまっ白な画面があるんですよ(ウムウム) まっ白な画面で(えー)ほんの片方に一寸黒い線が、片方に一寸黒い線があってね(ウム)それが、あっという間に目の前に、ふわーっと迫ったかと思うと、(ウムウム)“グシャーッ”(力をこめて)となるような感じ(ウム、ウム)何ていうのかな、だだっ広いんですけどね、だだっ広いものの中にふわっと、自分が近づいて行っちゃって(ウム)その無限大に広さをもつようなところの(ウム)接点に近くまできちゃってプワッとね(ウム)そこへ突然、あのー“白”だった場面が、“まっ黒”になる、スローモーションでありながら(ウム)速いようなかんじでクシャクシャクシャと(ウム)丸められちゃって、それで(フム)パッと終るような(ナルホドネ)それが何回か繰り返されるんですよ

T70 いつもそれ繰り返されちゃうの?

C70 2, 3回繰り返されちゃうんです(ウムウムウム)ときどき、はっとして目が醒めるけれど(アーソー)

T71 夢は、最近でも、よくみちゃうわけね

C71 前はね、ほんの少ししかみなかったけれど、この頃は頻繁に何かやってきて、『夢判断』って本には、そんなの載ってないからね(ウム)どうもそんなの判らないんだけど

T72 『夢判断』っていうのは、フロイトのですか?日本人のもの?

C72 あー、外林大作

T73 あー、あの本ね(うん)やっぱりあなたとしても、こう解釈してみたいわけよね

C73 それとか、橋を渡っていくとね(ウム)こう犬がいるわけですよ(ほうー)ほいで犬に追いかけてまわされるわけですよ(ウム)で、犬に追いかけてまわされると、どこにも逃げ場所がないもの、まわり、(うん)ほいで野っ原でね(ハイ)見ると電話ボックスがあって、電話の中にかげ込むのだけど、そこで目が醒めるっていうのね(ハイ)電話っていうのは、「自問自答」だって、「自分自身に対すること」だってね、「逃げる」とかあのー「何とか」っていうのはね(ウン)こう自分と同じような感情をもった相手を求めているらしくてね(ウムウム)自分の心としては、犬というのは一般に、“父親”とか何とかへの怖れをあらわしているらしいんですけど(ウン)(ウハ)

T74 それあなたが参考にして理解しているわけね

C74 ハー、そうです《問》ただその“白い”のだけはね(ウム)前、子どもの頃みた怖い夢っていうのは、オバケの顔とか何とかでしょ(ウム)そうじゃないんだけど、自然と、ものすごく恐ろしいの《強調して》何でもないんだけど。ただ“まっ白”のものすごく広いっていうことだけは、わかるんですよ《語気を強く》その中にぼつんぼつんと“黒い点”が見えたかと思うと、それはたとえ

来談者中心療法における夢の一考察

100 あるでしょ（ハイ）それがそのその1になる点がありますよね（フム）こうシュワッときたかと思うと、急にパッと自分の方に近づいてくるんですよ（ウム）そうすると目の前で、このところがぶっつきあって（動作つけて）、（フーン）それがものすごく誤差があるような感じでね（ウム）こう鉛筆で、さっさささとなったところを顕微鏡でみると、（ウン）すごく黒の中に、白のポッポッポとなったところがあって、（ウン）すごく実際には太い線のようなものがあるって、そのような感じがあるでしょ、（ハイ）そういった感じでプワァーッとこう広がったような感じで、それでハーッというような感じになる（ウム）そのとき、自分でものすごく不快感になるんですよ（ウム）怖いような、気持ちわるいようなね（フム、ウム）イヤな感じになって、その夢が何回も続くの

T75 だから夜なんか眠るのも、もうおっくうなっているか、もうイヤな感じ

C75 イヤ、そうじゃないけれど、うん、寝るのもイヤっていえばイヤですね、（ハイ）自然と眠たくないっていうかな、（ウムウム）眠る時間があるからやっぱり自分の好きなことしたいっていうか、好きなことしようがないから、フトン引っかぶっちゃう、それで寝る

T76 つまり、こう、あー今日はよく働いたとかね、できたという感じでぐっすり眠れない

C76 眠れない

T77 そういうことはできないですね、いまの状況ではですね

C77 はー《間》だから精神安定剤を飲んで寝ちゃうだけです

T78 やっぱり薬つかっているんですか

C78 はー、そうしないと落ちついてぐっすり眠れないから（ウン）

《間》しかし、あの夢だけはね（ハア）非常にこう、今も覚えているんだけど、ほんとにイヤな夢なんだよ《気持ちこめて》（ウム）あの夢みるのだけは、止めたいよ（ウム）

T79 冷や汗かいているみたい、起きたときに

C79 そうー。（ハー）何、何て表現していいのかわかんない（フーム）

《間》突然ですからね（フーム）何か自分自身の中の、別の声みたいなのがね、「これが100」、「これが10」みたいになっている感じでね（フーン）それで向うで「何しろ」といっているみたいな感じでね（ハァ）そうすれば、すわーっとかう伸びてくる感じで、（フーム）そのくせ、ふわっとなってくるようで、（フム）フワフワフワッときて、パッとこうずれるような感じで、グジャグジャグジャッと、まっ黒になったところからフワッと、白い線が伸びて（フム）また平面にもどるんですよ（ウン）そしたらまた白い線がふわっときて、ワッと広がって（繰り返しちゃう）、またそう、2-3回くりかえして、ハーッとなる感じなの

T80 生きた心地しないわけね

C80 生きた心地しない、まさしく（フーム）《間》15”ーそれ夜の、夜中の3時頃、突然ぱっと目が醒めるとき、そんなこと、この頃よくある。（ウム）夢も全然みていないのに、目が醒めてね（ウム）何時だろうと時計みると3時なわけ、またこんな時間だからと思って、またフトンひっかぶって寝るわけですよ（ウムウム）それがま

たこの頃、ひんぱんにあるわけですよー《間》10”ーまあとにかく、うちのオヤジとお母さんにはまいっちゃいました《タメ息まじり》

＜初回面接の夢のまとめ＞：夢①自分が落っこちていく。落っこちていくと、まっ赤に炎が燃えている。②まっ白な画面の片方にほんの小さい黒い線があって、もう片方にちょっと黒い線があり、それが、あっという間に目の前に迫ったと思うと、グシャッとなる感じ。だだっ広い中に自分が迫っていくと突然白だったのが、黒くなり、グシャグシャとまるめられて、何回もくりかえされる。③橋を渡っていくと、犬がいる。犬に追いかけまわされて逃げるとどこにも行く場所がない。それで野原に電話ボックスがあり、そこに逃げ込むところで目が覚める。

＜この回の面接で治療者が受けた印象＞

クライアントは、両親の不和に全身憤りの感情をこめて表現している。声の調子は、どなりつけているように、吐きすてるように早口であった。全体として張りつめた気持や息づまるような気持が伺えた。クライアントの人間不信感、孤独感、懐疑感が治療者にぶっつけられる。どこにいっても、すっきりしない落ちつかない気持が、“夢”を通じても感じられた。治療者としては、クライアントの残された健全な部分（洞察力の高さ、感情表現の豊かさ）に目を開き、面接を続行し援助したい気持が強くなっているのを覚えた。

2回目面接（3月12日）から3回目面接（4月16日）

の概要：この間に、両親の不和はいっこうに変わらず、母親は正式に別居し、某他県に就職してしまう。父親は、いま家の中では一番精神的にまいっているみたいで、自分はあまり余計な負担はかけられない。4月はじめに祖母が自殺未遂をするという「大事件」があった。

4回目面接（4月23日）

T1 15分まで、しましょう

C1 ー沈黙8”ーお話といっても、もう何も話すことなくなくなってしまうような感じ（ウン、ハイ）ー

T2 どうですか。その後の気持？

C2 えー、もう前みたいにこう悲観的になったりね（ウム）そういうことはなくなりました。（ウム）それからもうすること々気にして、誰が悪いんだとかね（ハイ）あの何とかか何とか考えるってことも、あまりなくなりました。（ウムウム）それだからいまはあの以前より楽な気持になりました。（アソウ）

T3 気持以前より、楽にいているのね。（ハイ）ウム。今日、落ちついているみたい（ハイ）ウム。魔の金曜日はどうでした？《笑み》

C3 さあ《笑いながら》別にそんな、魔の金曜日じゃなかった（ウム）

T4 ウム。まあそのね、あなたもこうね、そういうお家の中に一緒にいるとね（ハイ）何も感じないではいられなかったわけだよ。

(ハー)

C4 それで、あの、おばあさんが、あの帰ってきましたね(アソー)

(ハイ)あのうちでいまやすんでいるんで。(ウムウム)だからもうほとんど治ったんでね。(アソー)副作用もなかったし、(ウム)(ウム)

T5 ビックリしたね(エー)ウム。(ハイ)やっぱりおばあちゃん、少しでもこう、お父さんなりあなたのこう支えになってほしいですね。元気になって。

C5 支えになって欲しいという気持はあるけど(ウム)まずそれよりも前にまずおばあちゃんやらなんか頼りにしていちゃまずいという気持の方が強い

T6 ウムウム、おばあちゃんあまり頼りにしては、申しわけない気持

C6 ハイ、(ウム)だからね(ウム)誰がこう悪いとかね、何がいけなかったというのではなくて(ウム)とにかくもう一日一日をね

(ハイ)あの、やっていこうという気持ですね(ウム)

T7 いまの自分の気持はね(ハイ)ウム、いまそのことがね、これからの自分をね、支えになることにもなるわけね。

C7 ハー、だと思えます。(ウムウム)

<4回目の話題の概要>

4回目の面接：祖母が帰宅した。自分は一波越えた気持である。父は父、自分は自分の方向でやっていこうという気持になってきた。自分は高校進学を目標にしている。このことを祖母とも約束した。これからはよほどのことがない限り、つぶれないと思う。大事件のほとんどを経験した。いままでの自分はあまりに悲観的だった。この頃、家にも集中できるし落ちつける。世の中には、もっとみじめな人がいることを思っていたら、なんとなくこうなった。自分は恵まれている。15年間のわがままが総決算できたみたい。小学高学年からの両親の問題にケリがついた感じである。受験に打ち込むことによって落ちつけると思う。いままで袋小路のなかでぐるぐるまわっていたみたい。逃げ道が見つかり、光が差し込んできた。この頃は学校の友達とも安心してなじめる。なかまという感じである。「やらなきゃ」という気持である。近頃、気持よい疲れを感じ、悪い夢もみなくなった。ここのところ起こったことは「苦しかったけど、貴重な体験でした」。

<夢の表明>

C37 受験は僕は、大嫌いですけどね(ウム)とにかく受験というものがあることによって、その打ち込めるから(ハイハイ)おまけに、打ち込むことによってね、こうお父さんや家族の人たちもみんな安心するし、(ナルホド)心配せずに済むしね、また僕自身としても気にしてやっているよりは、そうやって勉強に打ち込んでいた方ははるかに気も晴れるしね

T38 ウムウム、だからお家の人にも、こう安心してもらえること、そ

れは自分が“打ち込む”っていうことですね

C38 まあ完全な解決法ではないとしてもね、(ウムウム)長期にわたるかもしれないけれど、とにかく僕ができることっていうたらそれが最善の方法じゃないかと思うんですけど(ええ)

T39 それに打ち込むって言うことが、ひいてはね、あのお父さんおばあさんを安心させるっていうことになるわね(ハイソウ思ウ)そういう感じだとやっぱり自分にも落ちつけるわね(ハイ)今まであまりにこう何かにつけてしよい込みすぎていた感じで……(ハーソウデス)ウムー《間5”》-

C39 だから、いつも同じところでね、袋小路のようなところでぐるぐるまわっていて(ウム)何か別のところに一寸曲っていけば容易にそこから逃げ出せるのに、(ハイ)それが見つからなかったということになるのですね(ウムウム)

T40 こう、もがけばもがくほどこうなんか、にっちもさっちもいかなかったみたいだね(えー)でもいまはそこから解放されたみたいない気もする。少なくとも

C40 解放ではないけれども、(ウム)少なくとも逃げ道が見つかって、光が差し込んでいるといった感じ(ウム)(ウム)

T41 暗やみの中でね、光がこうそっちの方向に自分が歩いたらいいんだということがはっきりみつかったということ(ハイ)ね。ウム

C41 ほんとうに考えてみれば、まっ暗やみでしたよね(ウム)(ウム)自分が、どこにどう行っているのかわからないし、(ハイウム)それこそいま自分が何をしているのかわからない状態でしたから(ウムウム)-沈黙1'50"-まあ心配ごとはこれで(ハイ)-応片づいたと思いますね

T42 ウム、ウム。良かったですね

C42 まあ、これから先、まあ、いまからどんなことが起こるかわからないけれども。(ウムウム)

T43 でも、いまの気持でならば、少しずつでもこう努力していきたいし、いけそうそういう気持もあるのね(ハイ)ウムウム、私としても、まあうれしいことだけだね。ハイ-間37"-やはりそういう気持になるところ体もあまり疲れたなあーって感じしないんじゃないですか?

C43 まあ、疲れることは疲れますけれど(ウム)こう何か悪い気分がしない疲れですか(ウムウム)

T44 ぐっすりこうもう、ホッとして休めるってね(ハイ)ウムウム

C44 まあかえってね。疲れたことが気分いいみたいだね(ウム)

T45 気持の悪い疲れじゃないのね(ハイ)ウムぐっすり眠れるみたい(ハイ)ウム-間8"-夢なんかどうですか?

C45 イヤその悪夢はみません(ウムウム)まあこの頃、そんなに夢みなくなった。(アソー)ただこう(ウム)僕は覚えている夢っていうのはおかしいが(ウム)こう見渡す限り水面というかね(ウム)それでこう、ほんのこの机《面接机》ですか(ハイ)1mぐらいの道がついているわけですね(ウムウム)これが水面からほんの10cmくらいしか離れたところについていて、それが水面たって、川みた

来談者中心療法における夢の一考察

いになっていて、(ウム) ドブ川岸みたいなものですか、幅は(ウム) 2, 3mくらい離れたところにまた同じようなね(ウム) この道が平行にずうっと見渡す限りついているのですね(ウムウム) それで途中道のところどころに柱が立っていて、どこだか知らないけど上の方に伸びているのです(アソウ) それで^そ^ら^の^色^も^こ^う^絶^{えず}^変^っ^て^い^る^ん^で^す^ね(ウム, ウム) それで^水^の^色^も[、]^道^の^色^も^こ^う^全^部^変^っ^て^き^て[、]^そ^こ^を^自^分^が^歩^い^て^い^る[“]^夢[”]。

T46 あー自分が歩いている(ハイ) ウム

C46 まあ、そのくらいですね。(アソウ) 他は別に悪い夢は見ませんし、(ウム) まあこの頃、くたびれているから夢もみないで眠ってしまうんですね。(ウム)

T47 かつての怖い夢だった、そういうことからするとね。

C47 怖いって言うか、気持ち良かった(ハイ) 夢から醒めたいんだけど(ウム) まあさめられないって言うか、夢だということがわかっているのだけれども、どうしようもない、(ウム) 何せ、同じ夢ばかりですから(ハイ, ウム) -沈黙10" ただ何回みたかあの夢は完全に覚えちゃいました(アソウ)

T48 ウム, ウム忘れられないよね。気持ちのわるい夢だったし

C48 忘れられませんね。一寸(ウムウム) ただまあこの頃になってね、(ウム) こうたて続けに起こったことは、まあ、夢じゃないけど、一生忘れないんじゃないかと思えます

T49 アソウ, 自分の心の中に残っていくって……ウム, あまりにも事件というには、大きすぎたわけよね

C49 そうですね。(ウムウム) とてもじゃないけど(ウム) テレビドラマじゃあるまいしね、(ウムウム) 予想もつかなかった(ハイハイ)

T50 よくもそれを乗り越えたなあって感じ

C50 まあ乗り越えたかどうかわかりませんが(ウム) やっと一息つけるところまで来たっていう感じで(ウム) まあ、うれしいっていう感じかね。(ウム) そういった感じですか(ハイ), ね、それで、やっと安心してぐっすり休めるっていう感じ(ウム)

T51 ウム。前進できるような気持ちになったよね(ハイ) ウムウム

C51 -沈黙43" -まあ学校へきてもね。(ハイ) 友達だってね、決して悪い奴じゃないしね(ウムウム) まあ個性豊かというか(ハイ) 変人ばいのもいるけど、(ウム) だけど先生もいるし(ウム) ほんと、こうそういう人たちまでがね、自分を心配していたんだと思うところ余計(ウム) やる気がしてきました

T52 ウム, ナルホド, そういった人たちに対しても、これから努力しなきゃっていう気持ち(ハイ) ウム

C52 まあ、学校にきて(ハイ) 何か気にするってことはありません(アソウ) まあ、学校にきてても気になってね(ウムウム) 勉強も手につかないっていう状態だったけれど(ウムウム)

T53 よく辛棒したね。やはり学校にいてもおんぴりできる感じというごと(おんぴりって)というか、楽しいというか

C53 まあ、前みたいな雰囲気と確かに変わって(ウム) 楽しいですよ(ウム)

T54 友達が一寸言っても、前だったらこううるさい感じだったよね

(ハイ)

C54 まあ、まあ、さほど気にしないでもいけるし、(ハイ) ほんとう、前はうるさい第3者しか見えなかった友達が、ほんとう仲間みたいにね

T55 あーそう“仲間”ってね、ウム

そして、この回は、以下のような応答のやりとりで面接を終った。

T61 いけそう?(ハイ) ウム

C61 -沈黙4' 31" -まあこう今までね(ウム) ずうっとあったことを思い出してみても(ウム) こうこういう気持ち、いまみたいな気持ち(ウム) 思い出してみると、こう悪い思い出っていうわけではないですね(ウムウム) いい思い出っていうわけではないと思うのですけども(ウムウム) こう特別忘れられない思い出っていうかね

(ええ) 将来、自分の為になるような思うことばかりですね(ハイハイ) だから、^こ^う^苦^し^か^っ^た^け^ど^も^悪^く^な^い^っ^て^い^う^か^な(ええ) ^貴^重^な^体^験^て^い^う^か《笑いながら》(ウム, ナルホド) ^だ^っ^た^と^思^い^ま^す^ね

T62 ハイ。自分の過去のそういうしたこと、いまの自分の気持ちの中にこうそっと納められるみたいね(ハイ) ウム, でそのことは非常に自分にとっても、まあありがたいことですね(ハイ) そういうめったにありえなかった体験、そういう感じなんですね

C62 ハイ。こういままでっていうかね小学4年から5, 6年にかけてのですね(ハイ) それと中学に入ってからの、こういうことが起こってからのことと、ずい分こういろんなことを考えてね(ハイ) かなりイヤな経験とか苦々しい思い出ばかりですけど(ハイ) こう今になってしまうと、忘れてしまいたいといったようなもの一つもないですね。

T63 なくてね。そのこと一つ一つが自分にとってこう意味ももっていた(ハイ) なんかそんな感じね(ハイ) ウム。まあ、願わくば、そういったこと、これからも自分の支えにこう、していきたいですね。

(C63 ハイ) ハイ。一寸時間きちゃったね。(ハイ) 今日はこれで終りにしましょう。(ハイ) どうもご苦労さまでした。

<この回の面接で治療者が受けた印象>

クライアントが家庭の問題に、感情の整理と決着をつけ、新しい自分の確立に向って、一波乗り越えてきた印象である。そしてクライアントは、これまでをふりかえって、苦しかったけれど、それを自分の貴重な体験として受けとめ、ややうす暗いなかを、夢にも表象されているように曙光のさす方に歩みかけている感じである。声の調子もやわらぎ、安心しきった感じがよく伝わってきた。話題も1分~4分くらいの沈黙が起り、初回面接で表明されたのと雲泥の差がある感じであった。

治療者としても、何かクライアントがこのようなところにたどりつくことのできた努力に敬服したい気持ちやう

れしい気持を隠しきれない感じであった。しかし、両手を挙げて、手放して喜ばず、もう少し面接をつづけることを自己確認する。

5 回目面接（4月30日）

話題：この頃、別に変ったことない。ただ中学校にいて、何かもう一つじっくりいかない。もともと自分は内気な方だが、友達となじめない感じである。“学校生活”についての作文で討論した。クラスの半数くらいが一流校進学→一流会社課長コースを目指していて驚いた。みんなメシのために、機械のようにになっている。一皮むけば“欲の固まり”みたい。

＜この回の印象＞自己の道を歩みはじめたクライアントが学校生活に目を向けはじめる。しかし学友の多くは、あまりに人間的魅力に欠け、機械のようにになっていることで反発を感じている様子がよく伝わってくる。

＜その後の経過＞6 回目面接（5月7日）に予定していたが来室せず。5月14日、担任教師より電話あり、I 君（クライアント）のことで話し合いたいとの申し出がある。①本人の家庭は、いま経済的に大変窮状にあり、本人も学校が終るとすぐ家に帰って手伝いをしていること、②父親は、資金ぐりに走りまわっている。本人も父親を応援し、2人だけで店の建て直しにまっしぐらに過していること、③本人は経済的に難しいので、公立高以外は断念しなければならないかもしれないことが進路指導の個人面談で明らかになった、④こういうことで本人も「面接をしばらく休みたい」ので、「担任を通じて伝えてほしい」とのこと。

治療者としては、以上のような家庭ならびの本人の現状では、これ以上面接継続は困難と判断した。それ以後は、担任教師とときどき連絡をとり、支援することとした。

7月下旬、12月上旬の2度、担任教師と会う。話によると、その後、本人は調子よくいていたが、家は経済的にいよいよ困窮し、父親は行方不明、本人は祖父母とともに某町に転居中とのこと。担任は登校途中、本人を誘って学校に来ている。車の中は密室であり、本人とは自由に話している。本人は落ちつき、かえって今度のこと（＝一家離散の事態）で楽になっているみたい。今後どういう事態が起こるかもしれないが、そのときには援助の面接をしてやってほしい、とのことであった。

翌年3月には、祖父母が期待した某公立校に合格したとの担任教師の連絡をうける。本人には念願の高校合格であるが、家庭の状況はいたって見通しが暗い感じがした。

事例2 I. K.

＜来談の契機＞彼女の受講している某大学心理学担当講師から、相談室もないし依頼したいとのことで、紹介されて来室。来談のいきさつは、その講師に直接電話をしたことから始まる。その後、その講師の講義が終り、実状を訴えたあと、翌日、相談依頼の電話をかけてくる。このとき、筆者はすでにその講師から話の概要をきき、継続して面接することを予定していた。

＜主訴＞本人自身は、相談申込み票の本欄は空白にしていた。紹介者が聴取していた話を総合すると、つぎのようであった。

①小さい頃からの両親との関係、②自分の高校卒業後、家出したあとの生活、③付き合いのあった男性との関係、④これからの人生、特に大学卒業後の職業生活。これらをめぐっての混乱した一身上の問題とそれを乗り越える方法について指導してほしい。

＜家族構成＞父高小卒68歳、母高小卒66歳、兄高校卒32歳、義姉高校卒32歳、姪1歳、弟大学卒25歳、本人。計7人家族。

両親、兄夫婦の4人で、鶏肉商を経営。弟のみ大学卒業後会社員。本人を除くといずれも関西某市在住。

＜治療者の面接開始に際しての受けとめ＞

紹介者の情報と受理面接（初回面接）状況での総合的な判断として、以下のような受けとめと援助目標を設定した。

クライアントの心理内界の混乱の回復と、周囲の人間関係、特に両親や過去に関係のあった男性との人間関係、の調整を自らの力ですっきり統合できるように援助すること。クライアントは、ここのところ無力感を感じて、「泣いてばかりいる」。これまで自己抑制し、意識の上で必死にしがみついていた自己が崩壊しつつあるのを感じて、どうしようもなくなっている。治療者としては、このようなクライアントに安全感をもって自己をみつめられるような場をともにつくることである、と考えた。

＜面接経過＞

初回面接（某年6月12日）から3回目面接（6月26日）の概要：面接中、ただ出るのは涙ばかり。1分～7分余りの沈黙が数回続くなかで、次第に自分の無力さ、だらしなさ、大学に決意してきてみたが普通の人間と変わらない自分、“あの世界”で接した人などに言及していく。2回目、3回目面接では、気分はやや落ちつき、小さい頃からの家の暗さ、両親の不和（母親の冷たさ、父親の女遊び、夫婦間の冷たさ）が表明される。両親は、こと商売のことになると一致する。両親との確執に悩み、これまで両親への憎しみ、怨み、非難をあげせることで、“反発心”に燃えていた。そして自分の混乱は、考えて

みると“愛”と“性”からきていると思う。大学で心理学の講義を聴いてそう感じた。家を飛び出して働らくということは、ほんとうに晴々としたことだった。しかしそこで知りあった男性とは、じき冷えてしまう。母親への甘えられなさを、施設の親なし子に見返えりに尽したい自分。

＜この面接経過での治療者が受けた印象＞

泣いて涙を流さないでは居れないクライアントがとても身近かに感じられた。このクライアントの背負った過去の重さに、治療者もともに思わず涙ぐむ感じ。しかし、“あの世界”から、何とか自分を建て直し、福祉活動に専心しようというこのクライアントの生きる強さに敬服の念が湧いてきた。自分のテーマとして“愛”と“性”が根ざしていることに気づく。男性遍歴も、けっきょく親への怨みの見返えしのため、自分のさびしさをまぎらわす対象としてやっているという感じがした。ときどき“甘え声”になるクライアントが印象的であった。

4回目面接（7月3日）

（入室時に、ピンク色のバラの花束を届ける。服装も明るい色。表情も明るい。）

T1 どうぞはじめましょう。《C、笑み》

C1 《間》15” 一週間ぐらいいね、（ハイ）すぐもう何にもする気がなくて何か泣いてばかりいたんだけど（ウム）でも何か一寸（ハイ）前とちがうのは（ウム）あのどんな状態でも（ウム）やっぱりゼミのこととかね（ウム）卒論だとかね（ハイ）そういうことちゃんとやりながらね《笑いながら》（ハイ）まあ泣いてたと言うかね（ウム、エー）うーん何をしても涙が出るんだけども（ウム）あの、前みたいにはばとね（ハイ）どこかへ消えちゃうとかね（ウム）それとかあの山へ行ってしまうとかね（ウム）あの、そういうふうじゃなくて（ウム）ゼミにでもすぐこう出たくないんだけどやっぱり自分のやらないいけないことはね（ウム）あのやらかっちゃんていうので（ウム）あの一生懸命やってたああっていうのが最近ね（ハイ）わかってね（エー）だからゼミの人たちはみんな知らないのね（ウム）私がこう、こんなふうになっていたっていうのはね（エエ、ハイ）うーん。

T2 で、そういうことをゼミの人、何か話してみてわかった？

C2 うーん（ウム）あのお さらっとね（ハイ）ちょっとこう「○○ちゃんやせたわね。」って言われてね（ウム）「うーん ちょっとね。あの、心配ごとがあってね」って言うくらいのことを言いましたけどね（エー）うーん。

T3 で、自分でそうこう友だちに、ゼミの友だちですか、言われてみて、はっと（うーん）自分のこと考えてみると、ゼミは一生懸命やってたって（うーん）

C3 卒論もやったし（ウムハイ）とにかく自分の生活の場所を離れないでね、（ウム）あの早く立ち直りたいというネ（ウム）そういう

気持ちがあったから（ハイ）いつもは、もし、いつも何かあったり、すぐさみしかったりつらかったりすると、すぐ（ハイ）どこかへ、旅に出たりね（ハイ）とか、お酒飲んだりとか（ウム）それとか、山へ行ったりすることとかでね（エー）やっぱり何かこうあいまいにしてたんじゃないかなあっていうふうだね（ウム）思うん。

T4 今度の場合は、そうではなかったのね（ウム）うん うん。そして親との縁談をめぐる話題のあと、思いがけなく、＜夢の表明＞が初めてなされる。

T6 お母さんのいうほう、つまり身になって自分を、こう、なくするよりもやっぱり自分は自分の考えを通して、それはそれで良かったって、そういう意味ですね。（うーんうん）うーん。

C6 まあ、あの場でね（ウム）親のことを聞いてね（エー）あの妥協する方が（ウム）世間から言う娘のね（エー）親孝行かもしれないけどね（ウム、ウム）でも私は、もし、自分が働くことと愛情に基づかないネ、（ウム）結婚をするんだたらね（ウム）何のためにね（ウム）今日まで来たのかわからないでしょう（ハイ）私は、ゆずってもゆずりきれないものは、このふたつだからね（ハイ）だからああいうふうに関にも（ハイ）あの、なんか貯金通帳とかね（エーエー）そういうものを投げて（ウム）投げられて（ウム）「もう帰ってくるな」って言われてもね、（ウム）なんか一面ではさびしいんだけどね（エー、さびしいわね）もうなんか（ハイ）なるようにしかならないっていう、なんかサバサバした気持（ウムウム）

T7 そういう気持、さびしいけどやっぱり自分はそれでいいんだってサバサバした気持ちにもなれて（うーん）行きつつある（うーん）

C7 でもね、（ウム）先週ね（ウム）あの、3つ夢を見たのね（ハンハン）そのひとつはね、（エー）あの、近鉄電車の、のりばへ行ってるの（ハ）それでね、（ウム）あのう、大阪へ行こうと思うのね（ウム）大阪へ、私のふるさと大阪へね（エーエー）どの電車に乗ったらいいかわからないのね（ウムウム）で、あのう、いつも特急に乗って帰るからね（ハイ）特急っていうのは、こういうふうな座席なのにね（ウムウム）その近鉄電車はね、（ウム）みんなこう、ふつうのバスの座席みたいになってるのね（ウム、ハイ）で、特急って書いてないのね（ウム）で、自分の目の前に電車が来てるからそれに乗ろうかなあと思ったんだけど（ウム）結局乗らなかったの（ハイ）そして、駅員さんに聞いたらね（ウム）あの「今のが大阪行きの最終だった」って言われたのね。（アーハイハイ）で、「新幹線だったらまだあるかも知れないから（ウム）新幹線ののりばへ行ってみたら」って言われてね、（ウム）私、新幹線ののりばへ行こうとしたらね（ハイ）で、地下街を歩いていたら（ウム）あの、前、実習に行ったね（ウム）施設の子どもがね（ア）階段のところみんな並んでるの、（ウム）で、「先生」って、声かけてね、で、私、「あー、こんな所でなにしているの？」って言ったらね、（ウム）それが、夢だからおかしいのね（ウム）「学校の帰りだ」って言うの（ウム、エーエー）○○○なのにね（エーエー）で、あのう、その中のひとりの女の子がね、（ウム）あのう、施設の実習に行った時の女の子がね（エー）あのう、私の

顔をじーっと見てるのね(ウム)で、その女の子の気持ちか、すぐわかるからね(ハイハイ)あのう、その子を、おんぶしてね

(ウム)あの、つれて行こうとしたらね(ウム)まわりの子どもがね、(ウム)「先生にあのう、施設の先生にね、(ウム)許可をもらわないとね(ウム)勝手につれてったらあかんよ」って言われてね(エー)それで私はね(エー)うーん、あの、その、私がおんぶした子どもにね(ウム ウム)「お姉ちゃんの行く所だったら、どこへでもついてくる？」って聞いたらね、(アー、ウム)「ウン」って言ったのね、(エーエー)それで私もうその子ものすごくしっかり抱きしめてね(エー) (うれしかったのね)うーん、もうすごく夢の中でね、一生懸命泣いてたの(ハア、ソウ) なんか、変な夢だなあって思ってね(ウム、ウム)思いがけなかったから。

(ウム)でね、もうひとつ、施設の夢を見たのね、(ウム、ウム)それは、もう自分が施設で働いててね(ウム)で、その時に、措置されてきた男の子ね、家庭崩壊で措置されてきた男の子のね(ウム)、そのう、経過書を読むとね(ウム)お母さんが、子どもをおいて、家出して、(ハイ)お父さんがね、すごい酒乱でね(ホー)あの、その子どもが3歳くらいの時、ねてる時にね、(ウムウム)そのう、足で目を踏んじったの。そしたらね、その子どもの目、つぶれてね、あの片目がぜんぜんなくなってるの(ウム)そんで、なんてこの子はみじめな子なんだろなあって思ってね(ウムエー)で、その子を、一生懸命、こう、育てるのね。(ハイ)施設でね(エーエー)で、その子、すごく頭のいい子でね(ハー)あのう、東大へ入ったの(ウムウン)《C、笑》それでね、すごく喜んでね(エー)で、結局そこからおかしくなるのね、(ハアー)笑わないで下さいね(エー、エー、ドウゾ)その子とね、同情からね(ウム)恋愛しちゃうの(ウム)そんでね(エー)あの互いに好きどうしなだけけれども施設のその、先生とその子どもっていうね(ハイ)、そういう関係でね、私をそこへ、就職させてくれた別な先生に対して、すごく申し訳がないからね(ウムウム)すごくね、苦しんでるの、愛情を取るかそれとも施設のその義理をね(エー)その、私を紹介してくれた先生に対する義理を取るかね、(エー)、すごく、夢の中で苦しんでいる夢を見てね(ウム)なんか、すごくおかしななって思ったん。(ウム ふしぎね)うーん。で、その時もね、その子どものね(ウム)男の子の措置されてきた理由を見ながらね(ウムウム)もう、本当に声を張り上げて泣いてるの、(ウム)で、起きて、思わずねお部屋の子にね「私、大きな声で泣いてなかった？」って言ったら、「いや、気が付かなかった」って言われてね、(ウムウム)で、ホッとしたの、(アーソウ、ハイ)

T8 でも、こう夢の中で、現実とはちがっていたとしても本当のなんか自分の、本当の気持ち、そういうのを見るような気がしたんじゃないですか？(うーん)

C8 私、やっぱり、自分の仕事っていうのは(エー)施設で働きたいん(アーハイエー)私もあのう、まあ、住んだりするね、(ハイ)あの家だとか、まあ飢え死しない程度だね、(ハイ)食物はあったけども、(ウムウム)でも何が一番つらかったかっていったらね

(ウム)愛情ね(ハアー)《力落して》それはやっぱり愛情がなかったら生きられないわね(ウムウム)で、そういうことをね、親から拒否された子どもっていうのはね(ハイ)まだ、子どもの時はいいかも知れないけど、ますますその自我がね(ウム)あのう、めばえてくればくるほどね、その事でね、苦しむと思うしね(ハイハイ)だから、施設なんか建物は、鉄筋コンクリートで、食事も3食ついてるけどもね(ウム)何が、かけてるかと言ったら、やっぱり子どもが、いつも自分のことを見てくれるっていうね(ハイ)愛情のうらづけのある、(エー)その人間関係にね(ウム)やっぱり、子どもは一番飢えてると思う。(エーエー)、それは、問題行動にね(ウム)万引きをしたりとかおねしょをしたりとかね(ウム)すごく、現実離れしたね(ウム)あこがれを持ったりとかね(ハイ)何か、まあ、そういう問題、施設の子どもの問題が多いって言うのはね(ウム)すべて何かこう、個人のね、(ハイ)持って生まれたとかね(ウム)血筋だとかね(ウム)そういうものとはぜんぜん関係のないね、(ウム、ウム、ちがうのね)やっぱり愛情のもつれと思うのね(ハイ)

T9 自分の場合の体験を通して、やっぱり施設の子どもの(ウン)思いは、愛情がないために色々な問題を起こしちゃっているんじゃないかって

このあと、自分の“愛”と“性”についてふれ、自分が性に関して、ある段階に止まってしまっているとか、変質ではないかという不安を表明する。

T26 自分の気持が本当に欲しくなればそういうありうるし(ふーん)いまはちがうだけってね、ウンウン -《間1' 50'》- 多少、こう具体的に就職のそういう試験だとか、そういう話もあるんですか？(うなづく)ウムウム -《間1' 40'》- 夢なんかは、さっきのこう、3つの話非常に、こう不思議な夢だったけども、内容としては非常にKさん自身でも切実なテーマ内容に思えるんじゃないの？ ウム 夢はよくごらんになるの？(うん)ウン

C26 もうひとつはね、(ウム)あの、大学へくる前にね(ハイ)好きだった人がいたのね(ウム)好きだったって言うよりも、もう(ウム)一年以上ね(ウム)つき合ってた、(ハイ)その人、私、その人はじめて好きになったね(ハアー)今までとはそのう、いっしょに何処も、こう、男の人と同棲したりね、(ウム)あの、ふらっとした気持で、いっしょになったけれども、その人は生まれてはじめてね、(ハー)本当に好きになったのね(ウム)それがもううまいこといかないものでねえ、(ウム)その人には奥さんがあったのね(ハイハイ)で、私、その、生まれてはじめてね、嫉妬するっていう気持を味わったのね、(ウム)で、朝、起きた時ね、(ハイ)、いつも、そばにいるでしょ、(ウム)朝、起きた時その人は、その、何日かはやっぱり家に帰らなきゃいけないでしょ、(エー)ずっといつらくてね(ウム)さびしくってね(ハイ)でね、そこでふっと思い浮かんだのがね(ウム)私、奥さんにもこういう気持を味わせていたのかなって思うとね、(アー)やっぱり自分はね(エー)まだやり直しがきくからね、(ウム)その、何ていうのかな(エー)

来談者中心療法における夢の一考察

だんだん自分のお父さんもそういう浮気でね、苦しんでいたのね
(エー) また自分が同じ被害者に、加害者になるなんてね、(エー)
できないなあと思った。(ウム) 「愛が強ければね(エー) うばい
つくすことが、方がいい」って言う人もいるけど、私はやっぱり、
それはできないなあと思ってね(エーエー) で、その人から別れる
こともね、(エー) 何かすごい勉強にね(ハイ)、あのう、自分が
もう大学へ行って、とにかく大阪を離れてやり直すことしか(ウン)
あのう、ないんだってようなね(ウム) そういう気持ちでしたの
ね、(ウム) その人がね、夢に出てきてね(ホー) その人、いつも
夢に出てくる時はね(ウム) あの、やつれているというかね、(C
笑) (アー、ソウ、ハイハイ) 仕事うまくいってなかったり、
結局その人、現実には、私が〇〇〇に出てきてから半年ぐらいたっ
て(ウム) 結果的には離婚してしまっただけでね、(ハイ、ハ
イ) 私、すごく、今でもね、やっぱり、良心が痛むというかね、(ホ
ー) あの人、(ウム) あのう、大学院を出てね、(ウム) あのう、
ふつうの会社の(エー) あの、大きな会社なんだけども、そこね
(ウム) 企画室長までいってたのね(ウム) その会社をやめて、
(ウム) その会社をやめたのね、(ハイ) そこらへんまで 私は、
大阪にいた時に知ってたんだけど(ハイ) それ以後は知らないん
だけどもね(ウム) 夢の中へ出てくる時は、いつもね(ウム) あの、
すごくもともと荒れてね(ホー) どん底になってる時に(ウム)
なってる状態でね(ウム) 私の夢の中へ出てきてね(ハイ) まわり
の人がね、あのう現実にもみんながね、(ウム) ホステスしてたこ
ろの同僚がねあの方は、あのう、何ていうの、「だめなんだからね
(ウム) あの I 子ちゃん早く別れなさい」って言ってくれたの(ハ
イ) ちょっと、こう、だらしのない所があるの(ウム) 何か、すご
く気が弱くて、何ていうのかな、(ウム) いろいろこうみんなが
回りで見るとはね、「あの方はだらしがないからね I 子ちゃん、早
く別れた方がいい」し(ウム) で、私が、大学通って〇〇〇にくる
時もね(ウム) お店のママがね(ウム) 「I 子ちゃんのためにも、
あの人と別れたのは、本当に良かった」って言うの(ウム) 本当、
私はその、つらい気持ちでね(エー) 別れたのにね(ウム) みんなが
ね、「良かった、良かった」「えらかった」って言うふうだね(エ
ー) 言うのね。そういう気持ちで〇〇〇に来たからかも知れないけど
(エー) すごくいつも、みじめになってね。(ウム) 落ちぶれてね、
私の前に現われるのね(ホー) でもね、いつもその人が、こう心の中
をわかっていうか、何かすごく都合のいい夢を見るんだけど(ウ
ム、ウム、アーソー) どうなってもね、(ウム) どんなふうになっ
てもね(ハイ) いつでも「私は、あなたの気持は、わかってますよ」
ってようなね(ウムウム) 何か、いつもいいかっこしてるのね、
夢の中で、(ウムウム) この前も そうだったわ、(アー、ソウ)
どこへ来たのかなあ、あの時は、あの時はどこで会ったのかなー
(間) 忘れちゃった。(ウム) とにかく〇〇〇へ来たのね。ます
ます、もっと落ちぶれてね(ウム) もっと、すさんでね(ウム) そ
んで アルコールびたりになってね、(ウム、ウム)、どうし
ようもない、もうみんなまわりの人は、どうしようもない人だって言

うんだけれど(ウム) 私はね、(ウム) あの、そういう人じゃない
って言うふうだね、(エー) 弁解してるのね(ウム、ウム) 心の中
でね。(ハイ、ソウ) そういう夢みたの(アー、ソウ) 何か変な夢
ばかりみてるの 《つぶやくような低い声で》

T27 その人は、今まで、こうつき合いのあった男性でも、意味はちが
うのね、(そうね) 自分の良き、こう、伴侶だったって言う。(う
ーん) ウム、ウム。

C27 はじめてね、結婚を、この人ならね、(ウム) とならね、結婚
したいなあって思ったのはね。(ソウ) この人が初めてだった。

(ウム、ウム) ふしぎねえ。

T28 ふしぎね。夢の中にまでくり返し巻き返し(うーん) 出てくるの
ね(うーん)

C28 そやけど、特別ね今もそんな未練は、もうあれはあれで終わった
んだし(ハイ) あの人、もうね(ウム) あのう、うわさに聞くと
また新しくやってるって言うからね。(ウム) 何とも思っていない
だけどもね(ウム) いつも出てくるのね(ウム)

T29 それだけ、こう自分の、心の奥底、魂に、近づいた人かもしれま
せんね(うーん)

C29 やっぱり私にこう、やきもちっていうものをね、(エー) はじめ
て感じさせたね(ソウ) 人だったからね。(なるほどね) すごく、
自分にとっては敏感になったわけね。(エーエー) だって今まで
どんなにいっしょに暮してもね、その人におくさんがあるうとね
(ウム) 他に恋人があらうとね(ウムウム) そんなこと、いっぺん
も(なるほど) やきもちやくなってこなかったわけね。(ウム) だ
から……。

T30 だから、本当に好いていたからこそ、こうやきもちやいちゃった
自分だったかも知れないね。(うん、そうかも知れない) ウー
ム。あー、ちょうど時間が、来ちゃいましたね。(うーん) はい。
じゃあ、今日はここまでしておきましょう。

<この回に治療者が受けた印象>

毎回、異なる服装をして来室し、ファッション・ショ
ーのような感じ。クライアントはバラの花束を贈ることに象徴されるように、治療者への好意感情を示しながら、落ちつきをとりもどし、来室を楽しみにしている感じがした。より明るい表情で現われていた。治療者との関係のなかで、クライアントは気持ちがまとまってき、焦点がでてきた感じである。全く自発的に初めて表明した夢3つプラス1つに象徴されるテーマ、“愛情”の深さと女になることとの意味をともに感じ合えたように思われた。

このあと、7月いっぱい、治療者の出張、クライアントの「南アルプス行き」によって休む。7月17日に速達で「いままで山しかなかったが、今山もあったのだ」との内容のハガキがくる。その後、南アルプス便りの絵ハガキが到着。高山植物『ハクサンコザクラ<さくらそう科>』《花言葉》— “幸福を開くカギ”。「夜は静

寂と星と暗闇ばかり」「朝4時まえに起きて登山者の朝食の世話をしている」「お昼の少しの暇に『ローラ、叫んでごらん』（心理学のレポートの課題図書）を読んでいる」とのことであった。当方は、下宿先に暑中見舞を兼ねて、「夏休み中もう一回面接したい旨」ハガキで連絡。

5 回目面接（8月17日）から6 回目面接（9月11日）

の概要：この人なら結婚してもよいという人がでてきた。あまり突然なので自分でもビックリしている。彼とは以前から知りあい。7月末に山から帰ってきて、手紙を出してそう感じた。山で集中豪雨のとき、自らの身を顧みず、自分や他の登山者をも助けようとした。“人間味のある”“頼りになる”人。東京で工員をしている。自分も就職は東京にしようと思う。彼は、自分よりもっと無言で努力し、ギリギリの生き方をしている。実習に行ってきた。今年は施設の方は、財政が収支赤字で、採用は厳しくなりそう。自分の気持はこのところ「暗雲の中からスカッと青空が抜け出たような心境」である。彼の結婚生活は、現実の厳しさを見ると甘いものではない。いままで満たされない愛情を、同じように満たされない愛情を求める施設児に見ることで自分を慰めようとしていたことに思い当たる。

7 回目面接（9月25日）

京都に研究会へ出かけた帰りに、郷里に寄ってきた。彼が10月に大阪に来たいというので事前の交渉に帰った。父は、彼のことを話すと、「おまえがそれでいいんだったら、いいじゃないか」といってくれ、父親の“大きさ”を感じた。母親は、従前どおりで目クソが鼻クソを笑うようなことをいって、ちっとも変わらない。自分は、自分で生きる道を選んだのだから、いままでの過去のこととはちっけなことのよう思う。彼は彼のことのみ話して、私の過去の“暗い面”を話したくても話せない。

<夢の表明>

C38 — 沈黙25' — 25歳で大学に来たってそんな話はするでしょ（ウムム）でも、「それまで何やってた？」とかね（エエ、エエ）「なんでそんな遅くまで」というようなね、そういうことは、全然いわないんですね（ウム）「よくきたね」、○大へよく25歳になっていくと思う気持になったときにね、「よく頑張ったなあ」というのね。「僕も、行きたいと思ったときが何べんもあったけど、そのたびに自分の甘い、そのころ、自己流のこう考えをもってね、（ウム）結局は、行きたいって気持はあったけども行かなかった」、「もうそれを越えて、大学へ4年間自分でやり通した」ということは、ほんとうにそれだけでもえらい」って、そういうふうにしかこういわない（ウン）

T39 だから「25歳までそれまでどうしていたか」ときかかれたら多少はこう自分で話せるけどもね（ソウネ）たかもしれないけど、（フーン） だけど「よく頑張られた」といわれると、いう気にもならない、言う必要もないという感じね（C、笑いながら） ウーン（ニコリとして）—間—そういう彼って、とっても開っぴろげって、広い、こだわらないって感じなんです（ウーン） ウーン—沈黙 2' 25" — 近頃は“夢”みるようなことない？

C39 ウーン、きのう、夢、（フーン）きのうの夢はね（笑いながら）あの一（ウン）家へ連れて帰った夢をみたの。（ソー）ウン、それでフロに入って、まあ、連れて帰ってね（ウンウン）フロをわかつて、「フロを入ったらいいわ」っていったら、そうしたら、そのフロが入れないの（ハー）家のフロがいつの間にかね（エエ）変っていてね、（ウン）その畳の上にフロがあるの（アー、エエ）それ、こんなはずじゃなかったのに、どうしたのかな、まわりにフンが積み上げてあってね（笑いながら）（ハイハイ）何か、フロに入った水がこぼれたらね、一体ぬれたらいけないものばっかりがね、フロ場の中においてあってね（ハイ） おかしな夢みたな—と思って（ソー）で、しょうがないから、みんな畳を上げてね、その一、一所懸命それやってる夢みたわ

T40 ウン、やっぱり彼を連れて、フロに入りたいのね

C40 《笑いながら》いやそれがそれがどういうことかわからないけれど（ウンウン）ウーン

T41 で畳をとったのは、自分なの？

C41 そう、（ハーナルホド）で一所懸命、畳を上げて、だっどおしてフロ場があんな大きな12畳くらいのたたみの中に、パッとフロ桶があるのね（ハー）おかしな—と思って、このフロどうやって使うのかな—と思って（フムフム）だから私も知らないのね、そんなところで暮してないから（フムフム） だけどきくのはケチをつけてるみたいだからね。（ウーン）（エエ、エエ）自分でひとり、畳を上げていたの。（エエ） 何か変な夢をみたな—と

T42 ええ、やはりこれからの生き方を、自分で探るっていうふうな、（C、ウハハ）生活の、いちばん基本になるフロがね。

C42 どおしてあんな夢をみるのか

T43 自分でも不思議な感じね（笑いながら）

C43 ウフフフ（笑いながら） よく夢をみるけど、何か、本当に、変な夢ばかりみて。

T44 何か別にいままでのことで、連想するようなことあったの？ そのフロとか、家というのは、この前帰られたしね

C44 ウーン、大阪の家で、今度、やっぱり彼と一緒に帰るっていうのでね気にしていますわね。（ナルホド）私も。何かイヤなこといわれないかあってね、その、もう何ていうかな（フーン）（やっぱり自分の）やはり肩身の狭い思いをさせたくないしね（ウムム）

T45 それで10畳だったかな、広々とした、工夫したりして（笑い）

C45 イヤ、ちがうの、行って両親の前でね、そんな、外貌、容貌もそんなに立派じゃないし、（ウン）そんな、その何ていうかな—（ウン）まあ大体のことは言ってあるんだけどね（ハイハイ）

何かいられないかなーと心配しているの(ウン) 気を使うね
(ウン, ウン)

T46 彼自身がね, それを少しフトンでかこってあるところ《C, ク
スクス》誰も見てなかったの, そのフロに入るところは。あなた
と彼しかいない。

C46 そう, 私がフロ場に案内していったね。(ハイ)でフロに行っ
てすごかったわ (ウン)

T47 気持ちよく入れたみたいですか

C47 でも入れなかったわけですよ(ナルホド)

T48 炊き口がどうなっているかわからないし

C48 全然わからなかった (ウン) ほんとうに奥座敷の中にポン
とあるという感じでね (ウンウン) ほんで, (かといって家の
人にもきけない) フロに入っている気分のところじゃないの
ね(ナルホド) かといって家の人にきいてよいものかどうか,
わかんないからね(ウン) それでわかんないすごく悩んだわ

T49 きくと, 「あんな人連れてくるから」といわれちゃうんじゃない
かという恐れ感じた

C49 イヤ, 「そんな使い方知らないのか!」といわれるんじゃない
かという

T50 ウンウン ハイ, 非常に不思議な夢ね

C50 ウーン

T51 ハイ。じゃ今日は, 時間がきちゃいましたから, ここまでにし
ましようか(ハイ) ハイ。

<この回に治療者が受けた印象>

髪型もパーマでセットし, どころなく“綺麗だなあ”
という雰囲気漂っている。将来設計のために, 現実
に“前向き”に動き出したクライアント。家に帰り, 父親
の偉大さをかみしめる。母親は相変わらず。しかし, いま
更追いつくことをしないで, 自分は彼の共同生活,
職業生活に挑もうとしている様子がよく伺える。12畳の奥
座敷においてあるフロ桶に, 彼を案内して入れようとする
が, 炊き口がわからないという“変な, 不思議な夢”
に考えさせられる。安心して彼を両親に見せられないで
気遣いしているクライアントがおかに感じられた。

8 回目面接(10月9日)から9回目面接(10月16日)
の概要: 彼を大阪の家に連れていった。兄嫁がビールを
用意してくれた。両親はあまり言わなくて, かえっ
て行く前の彼は気をそがれたみたいという。これまでイ
トコに受けた性暴行のことで, 叔母《母の妹》が手紙で
詫びてきていた。しかし今更そんなこと詫びられてもど
うしようもない《激しく身を切るようなさびしい涙》。
これまでのことをふりかえると, 自分は雨が降れば何が
何だかわからず“躁うつ病”のようになり, ほんとうに
ぐったりしたり, 突然わけもわからず怒ったりしていた。
いまは雨降りは雨降り, うれしければうれしい, 悲しけ

れば悲しいと感じる。これまでの過去のこと, やはりこ
こまでくることが必然だった。自分だけにしかわからない
苦しみというものがやはりあるように思う。<9回目
面接>《ほとんど無言で, ときに悲しそうに, ときに激
しく泣き続ける。》途中「心の病気は治らないの?」と
甘え声できく。治療者は「ボクはそう思っていない」と
伝える。面接終了直前, 「私もうここに来てダメだわ」
といて急に顔を伏せて泣き始める。面接終了ぎわ「私,
じき醒めるわ」と低い声で話して帰る。《この回のクラ
イアントの様子から, もしや自殺しやしないかあるいは
来室しなくなるかもしれないがそのときは危険だと感じて
「来週も, 私, ここにいますよ」とやさしく伝える》。

10月18日: 本人から便箋6枚に記した手紙を受理。「自
分はやっぱり結婚できる人間ではない。自分で自分の傾
向を“また病気がはじまった”と心の中で呼ぶ声がり
出した。今度こそはほんとうに悲しい。いまの彼は誠実
な人だが, 自分はすぐ嫌いになる。……述べたことはす
べて真実である。しばらく考えてみたい。《2ヶ月く
らい前の夢とか》「むかしの自分を, 今の自分がみてい
る夢。むかしの私はやっぱりホステスをしていた。それ
を見ている私が心の中でほっとしている。そして『これ
でいいんだ』って, 今の自分が言っている。」あの頃は,
まだ心にスキマ風が吹いていない時だったから, 変な夢
をみるなあって全然気にしていなかった。……私はわが
ままなのか, なぜこんなに心が変わるのか。これまで話
してきたこと, 今の彼と結婚したいことはうそではない。
叱ってほしい。先生の時間や心を煩わせるのがほんとう
につらい。』

10月23日: 治療者から返信。「真実さあふれる手紙を
受理したお礼。とても不安な気持, 自分が信じられない,
他人が信じられなくなることの怖さはよく理解できる。
“しばらく考えたい”ということ私を尊重する。私は
退屈していない。叱りたいより, 目覚めてほしい。『自
分は自分でしかないことを』。また考えなおして来室さ
れたい。お待ちする。」との主旨の手紙を出す。

10月29日: 夕方電話がかかり, 「今まで自分の過去の
ことを彼に伝えてなかった。彼もきいてくれなかった。
明日, 彼と東京で会うために出かける」とのこと。治療
者も, 彼とじっくり話してくることを勧める。そしてま
た再開することを希望する旨伝え, クライアントも了承
する。

10回目面接(11月6日)

彼と東京で, 土, 日に会ってきた。今度は自分の過去
のことを, すべて話した。彼は, 両親の愛情に恵まれな
いことを施設の子どもに求めたり, また気分の浮き沈み

のかたちのままで他人に接したら、けっきょく自分がダメになると注意し、励ましてくれた。“心を治すこと”を勧めてくれた。傑作なこと、大阪に貯金通帳を忘れてきた。そしたら手紙で返送してきてくれたが、一筆も書いてなかった。いままでいつも駒ネズミのように大学の掲示板をうろついていた自分。心の底では両親にわかってもらいたいと感じている自分。

＜夢の表明＞[㊦]①。「彼と大阪の家に泊っている。自分たちは廊下に、両親は畳の部屋に休む。母は『明日、朝早いから寝ていなさい』という。彼は『私も朝早いから起きますよ』という。すると母が『あんたたち若いのに寝ていなさい』とまたいう。両者の間に、障子が立っていてとても印象ぶかい」。[㊦]②。「家の近くの銀行に預金に行く。預金課長が『利息の高いローン、利回りのよい方にしなさい』と勧める。自分はウナだといって帰ろうとする。すると行内に閉じ込められてしまう。しかし自分は何とかして脱け出し、まだ暗い町並みの隅っこにうずくまっている。家に明るくなって帰って両親にいうと『ローンの利息の高い方にしないのか、馬鹿だねー』といって叱られる。」自分はよくこんな家のことをよく夢にみる。“不思議だ”《明るい顔で》。彼が励ましてくれたし、これから月末にかけての施設採用試験の結果が待たれる。自分は疲れたとき、気持が沈む。

＜この回に治療者が受けた印象＞

約20日ぶりの再会。前回の自殺しやしないかと不安にさせるどん底のクライアントの気持を、彼にも伝えに行くことで、自分の“表裏一体”を理解されたとのクライアントの安堵感、励まされたという感じがみなぎっている。彼と自分とがお互いに2人の“暗い”部分を分け持つことができるようになり、いままで以上に素直な表情になってきた。治療者に夢を語る口調も明るく、“家”についての不思議な夢を、変だ変だといって自由に語るクライアントが、より身近かに素直に感じられた。

11回目面接（11月20日）の概要：

親との心理的距離のもち方について、自分にとって2人しか居ない両親の存在。それに背を向けて、反発するのではなく、腹いせをするのではなく、心底から過去を精算して歩みたい、接近したい。いままで“甘えられない親”“甘えると怒られるので怖かった自分”であった。だからつい先を読んで、何でも断わってきていた。子どもにとってその親は、代わりえない。親は要らないといって、今まで気負っていた。これからは、“親に歩み寄る努力”をしたい。

＜この回に治療者の受けた印象＞

意識の上で反発し、離反していたクライアント、同時

に心底では甘えたいと感じていたクライアントが、心から過去を精算し、歩み出したい、親に接近したいという素直で、静かな、しかし力強い気持になってきているのが、治療者にもひしひしとしみ込む感じであった。

12回目面接（12月11日）

入室するなり、「父親から手紙がきたの！」とうれしそうに話す。ほんとうに突然のことで、今まで待ちに待っていた大学への手紙が忘れた頃に、来た。家に就職がないと電話をしたら、偶然父が出て「就職がなければ、大阪に帰ってじっくり探すように」といっていたし、手紙にも書いてあった。やっぱり父親は自分を忘れていなかった。母は、本当の気持を言えない人だということを先生に是非話したい夢から気がついた。＜夢の表明＞

C16 それでね。(ウム) あの一、うーん、先生にとっても話したい夢があったのね(ア一、ソウ) (ハイ) あの私が、あのセララー服着てね、あるおソパ屋さんに養女に行ってるの(ウムウム) あそこへ、結局もらわれていったんだけどね(ウムウム) その養女にもらわれていった先のお母さんというのはね(ハイ) あんまり意思表示をしない人なの(ウム、ハイ) その血縁関係がないからといって無理に反対に、家において無理に愛情関係を作らない人なのね(ウム) で私はそれがすごくこうあの物足りないのね(ハイ) で、友達なんかをね、学校から、友達を家に連れていくと(エエ)、何か色々あのソパとかお料理とかをこしらえてね待っていてくれるのだけれども、(ウム) その友達に対してはね(ウム) そんなやさしいことばだとかね、そのうちの娘がという、そういうふうなこといわない人なのね(ハイ) それでその(ウム) すごくその何か何かでね、その人が散歩に行こうといってね(ウム) あの私と一緒にね、はじめてその人とふたりでねそのお母さんと散歩にいったわけ(ハイハイ) で土手の上をずうっと上って行ってね。(ウム) こう町をみながらね(フムフム) (エエ) 「別にあんたが可愛くもらったんじゃないかって、(ウム) あの一、何となくってさびしくってね、あんたを養女にしたんだ」って、お婆さんというのはね(ウム) で、「別に嫌いじゃあないんだけど、私はこういう人だから気にしないで欲しい」っていうことをね、そのお婆さんは言ったのね(エエ) で、私、そのお婆さんの顔っていうのは、近所のお文房具屋さんのお婆さんの顔なのね(エエ) ふん、そう、で何かその夢みてね(ウン) すごくお母さんのこと考えたのね(ア一ソウ、ウム、ウム) 何かとっても印象的でね、(ウム) 私のお母さんもあいう人だったんじゃないのかなあーと思うの(ナルホド、ウムウム) うーん。(ウム) ほんとうに、いま卒論でね(ハイ) あの一、子、幼児と環境なんかということで、子捨て、人殺しとかね、いっぱい出てくるのだけれどもね(ウン) やっぱりお母さんのあれでも精一杯ね、やってくれたんじゃないかと思うの(ウム、ウム) —《うれし涙をぬぐいながら》—

T16 《聞》ね。いままでを考えて、あるいはいままでには不満が多かっ

来談者中心療法における夢の一考察

- たけれども、あれでも自分のお母さんだったって《C、うなづく》
精一杯やってくれたんだってね（何か） ウン ウム
- C17 なんであんな夢みたのかわからないんだけど（エエ、エエ）とって
もね朝起きたときね（ウム）すごくじーっと考えさせられる夢だ
ったの（アーソー）そのおばさんがね、（ウム）その「可愛くって
もらったんじゃあないんだと（ウム）何となくさびしくて」て
いうてね。はじめてその（ナルホド）
- T18 そのおばさんの気持を、はじめて言ってくれたのね
- C19 うん、いつてくれたのね。（ウムウム）その時はじめてね（ハイ）
自分はおばさんから、そのあの、何ていうかな、こうことばでいっ
ばいってもらわなかった。すごくさびしかったんだけど（ハイ）
ふつうの養女にいて、お母さんとか娘とかって関係じゃあな
くって、よくわからなかったんだけどもね（アー） おばさんが本
当のことを言ってくれた（ナルホド）とってそれでもよくわかっ
たっていう（ハイ）気がした（ウムウム） だけど、
- T19 そのおばさんがね（うーん） それは、現実の自分の親のほんとう
の気持の、代弁かもしれないって
- C20 うーん、そのように結びつけてよいかどうかわかんないけども
- T20 うん、少なくとも自分はそうじゃないかと、あとで考えて思った
のね
- C21 《うなづく》（ウン）
- T21 だから、今まで、ちょいちょい“夢”を話して下さったけど（ウー）
意味がわからなかったり、不思議だったり、わけがわか
んなかったけど今度の夢は自分でもそう理解しているわけね
- C22 そういふタイプの人があるんだなっていうのがね（ナルホド、ウ
ムウム）
- T22 ウム ウム 《間》—25*— だからその夢は自分にとっても
現実に、近所に住んでいらっしゃるおばさんになって出てきたんか
な
- C23 ふうん うん（ウン ウン）—沈黙35*—
- T23 お母さん、つまり自分のお母さん、あまり自分の本心を（フウ
ン）話さないかた、そういうタイプの人じゃあないかって（フウ
ン） ウム ウム —沈黙30*—
- C24 何か、お母さん冷いってね、よくあの（エエ）まあ家にいた頃、
こう高校生の頃（ウム）こう反抗したんだけど（ウム）その冷
いって性格自体はね（ウムウム）何かもうそんなに責めてもし
ようがないっていう、（ハ—ナルホド）何ていうかな（ウン）
- T24 いくらすがりついても、すがりついても、それは無理だった
- C25 フウー、あ—いう人なんだなあ—っていう《Tと同時発言》
何か、それがね、ふつうに思える、自分がこういう人であるように
ね（ウン）お母さんがああいう人なんだなっていうことがね（エエ）
- T25 そうして、ほんとうは欲しくなかったけれども、何かさびしかっ
た。でもそのことばに含まれるようなね、やっとその一言いわれる
ような、そんなお母さんね
- C26 まあ—、一寸、あの夢のお母さんは（ウン）とって理想のお母
さんっていうか（ハ—ソウ）文房具屋さんのおばさんはね（ウンウ
ン）こう日本の、ほんとうのお母さんという気がして（ハイ）うー
ん、まあ私のお母さんとはずい分タイプはちがっていたんだけど
（ウン）でもほんとうのどこね（ウン）言ってくれた、「何も欲し
くってもらったんじゃなくて（ウー）さびしいからもらったんだ
とね、いつてくれてね（ナルホド）その、「世の中のためだ」とか
ね、（ウン）「あなたが可愛いからだ」とかね、そういうことをい
わなかって（ナルホド）ほんとうに「何となくさびしいからもらっ
たんだ」ということを言ってくれたというのがとってもうれしか
った（印象的だった）うーん。あんな夢どうしてみたのかな—（ハ
アー）夢にしてもほんとうによかったなあ—と思ってね《うれしそ
うに、しみじみと笑いを浮かべて》
- T26 うれしかったのね（うーん） ウム
- C27 何かしみりね（ウム） その—、人の気持をきく思いがした
のね、あの夢の中でね（ハ—ソウ、ウム ウム）
- T27 夢からね、人の気持をね、きくようになったって
- C28 関係があるのかな—、夢ってね
- T28 ハイ。夢が何かそういうこと、教えてくれたような気がする
- C29 ウン、《笑み》そんなの、わかんないけど（ウム）でも不思議だ
なあ—と思っている。《間》 ふつう、こういう状態でなかったら
（ウン）忘れてしまう夢かもしれないけれど（ハイ、ハイ）
- T29 でもそのときみた自分の夢は、ほんとうにこう（ウー）救いにな
ったんじゃあない？ 《間》 うれしかったということね《やさ
しく》—間15*—それはいつ頃みたの？
- C30 それは、大分前、一週間、もうここ二週間来てなかったでしょ
（エエ、エエ）ここへね、二週間前ぐらいだったかな（ウン）
- T30 何かその夢みたあと、ですか、そのうちに電話かけたっていう
のね（ウン）それで手紙がきたっていうの、何かこう、何ともいえな
いこう……
- C31 同じこと考えていたのかもね（T、ええ、ええ）
- T31 必ずしも意識の上でははっきりしてないかもしれないけれど、潜
在的にはこう自分の方からね、そういう気持になびいていたのかも
ね
- C32 何かほんとうにね（ウム）生活していく上にはね、（エエ）貯金
を下ろして暮らしているでしょ（ハイ）だから、同じお金のね
（ウムウム）《うれしい涙声》お金は一緒なんだけど（ウム）
ここ《父からの手紙》に入っていたお金はね（ハイ）何かとって
うれしかった（ハ—ソウ、ウム ウム フム）《C。涙が頬を
伝わる》—《間》10*— だから（ハイ）
- T32 初めて、こう親からほんとうに好意のあるお金っていうことね。
親の気持のこもったお金って、初めて手にしたような感じ？
- C33 《黙ってうなづく。しみじみと味わいながら》（ウム ウム）—
沈黙10*—
- T33 素直に、こうありがたく受け入れられた？
- C34 《ユックリうなづく》（ウム ウム）—沈黙45*— 先生に
ね《涙顔で、しかし明るい顔で》（ハ—）電話で知らせようか
なと思ったんだけど（エエ）でも、何かとおとつ、手紙にでも知

らせようかなーと思ったんだけどね(ウーム、ハイ ハイ)でも今度行くからいいやと思って、(ハイ)何か子どもじみているでしょ(ウーム、ウーム?)うん 手紙もらったってね(ウン)先生だっけきつと喜んでくれると思ったけどね(エエ、エエ)でも何か、一寸照れくさかってねえ(照れくさかった?)うーん(ウム、ウム)

T34 いやあー、いままでね、こう大学の掲示板のところに行っても、こう今日もきていない、またこの次もきていないときびしうに話しておられたKさん、いつ手紙がくるんだろうなーと思っていたけどね(ウン)でも今日ほんとうに聞かしていただいて、私も涙がでそうだった《C.鼻をシュンシュンとかむ》もともと、私自身、近いうちに、正月ぐらいを契機に、Kさん、家へは絶対帰られるだろうなあ、とは思っていましたが、《間》あの2週間前のね、こう非常に重ーい苦しい状態を、こう突き抜けられるとね

(以下略)

<この回に治療者が受けた印象>

治療者は、この日の朝、“いまがクライアントにとって一番大切なときだ。苦しい底だ、ここを乗り越えれば正月にもクライアントは家に帰れるであろう”という自問自答をしていた。面接では、劇的に父親からの手紙を受けとったことで、クライアントも治療者ともに思わず感動の涙が頬を伝う。また母親の性格タイプについても夢を通して理解できるようになってきた。“養女”としてほんとうは欲しくなかったがさびしいからもらったとソバ屋のオバサンが実は母親だったかもしれないということ洞察したクライアント。ここ10数年来の怨みや敵意を手紙でわびる気持ちになったクライアントに心底から敬服する感じであった。治療者もしみじみこのクライアントと付き合ってきたことの意義を味わえた。

12月13日：12回目面接直後、下宿に帰りながら考えたことの手紙が来る。「今日はとてもうれしい日だった」「先生と話したことで『親孝行することで、これからは両親に甘えたい』ってことば、後になってしみじみそうだなあって思った」《中略》「それから夢というもの不思議だ。夢についてなど今度のことがあるまで考えたことなかったが、カウンセリングを受けるようになってずい分ヒントを与えてくれていたような気がする《後略》」というクライアントの自発的表明である。夢告である。

13回目面接(12月18日)から14回目面接(翌年1月22日)の概要：夢に出てきたおばさんは大学の近くの文具屋のおばさん。品切れでもていねいにあやまってくれて、また買いに行きたくなる。ゼミの友達が電話をかけてきて自分がすっかり変わったとってくれた。自分はゼミでは“異常だ”“変りもの”と思われてきた。いままで自分はわけのわからないものに動かされてきた。いまははっきりとちがいが、“自然”でいられる。身体と精神がバ

ラバラであった。二重だった自分がひとつになった。卒業試験もみんな終わった。正月家に帰った。自分だけがお年玉をもらった。2日には試験や卒論があり帰ってきた。これから就職の算段をしないとイケない。東京への就職。

1月29日、2月5日 両方の都合で休む。

15回目面接(2月12日)ー事実上、最終回の面接ー

就職は養護施設一本で当たってみたがどこもなかった。待つつもり。卒業ゼミ旅行で紀伊勝浦に行き、“活けハマチ”を家を買って帰った。それ以前に父から手紙が来て「余命短かい」と書いてあった。現金なもので父は喜んで元気になった。そのうしろで母が目配せをした。自分は母を今まで思い過ごしていた。母は“表現するのが下手な人である”。ショールの買い物にいくと、派手なのを勧める母。年下の彼への配慮をしてくれた母。自分が変わると家の雰囲気まで変わってきた。先生に話していなかったが、“初恋の人”《4回目面接の夢に出た》と東京にいる彼のどちらにしたらよいか“怖かった”。でもいまは決心がついた。彼とこれから東京での“現実の生活”を一緒に取り組める気持ちになってこの前からも彼と話し合っている。以前の人に「サヨウナラ」が出来る。

<夢の表明>

T29 ほんと、この4年間でできごと、大きな変化ですわねえ。

C29 うーん ー沈黙1'05"ー

T30 近頃は、どうなんですか、夢なんかみないの?

C30 この頃は《笑いながら》(ほお、見ない?)もう(あーそう、不思議な夢だったわね。)前ね、前、先生に話さなくても(ハイ)その何ていうかなあの、12月頃、12、11月頃見たのね(ウーム)で、あの、おもしろい夢みてたのあったのだけど、もう忘れちゃった(忘れちゃった、ハイ)で、この頃は、そうね(ウム)ふつうの夢は見るけどね(ハー)でも起きてからね、ジューッと考え込むような夢はみない(ハー、ウム)

T31 奥深いところで、あまり、ひっ、あまり自分をとられるような夢、なくなっちゃったのかな、ウム

C31 ふーん、そんなことに拘わらなくなったのかなー(ハーツー、ハイ)いっぱい色んな夢は見ているかもしれないけどね(エエ、ハイ)あのー目が醒めたときに(ウム)あっ、おもしろい夢みたなと思うけどもね(ウムウム)そのことでジューッと起きてから、考え込むようなね(ハイ)夢を見ないし、……

T32 意識であり、とられない

C32 うーん、自分でも、そんなふうに拘わらなくなったし(ハー)どうしてかな、忘れてた(ハーツー)

T32 ここでお話になった、あの、例の、あの“文具屋さんのオバサン”の夢だったかな、(あーあれ)あれが最後だったかな

C33 はい。(ウン)うん

T33 なんか自分の中でも、こう、すっかりできたような感じなんでし

ようね (ウン) 拘わらなくなったという (うん) フム

C34 お母さんともね (ハイ) あの、お母さんという人がね (ウム)、母親としてではなくてね (ウム、フム) そのひとりの女性としてね、(ハイハイ) あのわかるようになってきたというかね (ハイ、ハイ) あの口数が少なくてね (ウン) あの、何ていうかな、あんまりこう (ウム) 愛情っていうのはね、こう態度で示したり、こうことばで示したりはしないんだけど (ウン) しない人っていうかな (ウム) それはもうお母さんの性格だからね (ウンウン) だから (エエ、ウン) それの反面、お父さんはね (ウン) 自分がさみしかったら、(ウム) もう「ダメですから、(ウン) 《笑い》もう死にますから帰ってきてください」って《高笑い》手紙を書くようなね、人だしね (エエ) 私は、そういうお父さんは好き、性格としてね (フム) でも、そのお母さんは自分はずらくても (ウム) 自分がもし仮りに死ぬようなことがあっても、絶対子どもにはそういう手紙は書けない人なのね (ナルホド) それが判ったの (ハイ、ソー) ほんとになんでもう一寸早くね (ウム) こんな幸せを知らなかったんかしらん (泣き出す) (アソー、フム) 《鼻すする音》

T35 一沈黙25' — お父さんはお父さんの持ち味というかね、あるわけね。でもお母さん、ほんとうに表現しない人なのね (ウン) もっとそれを早く知ればよかったって 《C、うなづく》そこには、悪意とか子どもが嫌いじゃなくて、表現、自分自身の表現もできないっていう感じなんでしょうか

C35 そおね (ハイ、ウム) そういうことに、そう全然慣れてないというかね (ハイ ハイ ウム ウム)

T36 だから自分のつらさとか、自分のうれしいこと、そういうこともこう子どもにも伝えられないのね (ふーん) ウム ウム

そして東京の彼との現実の厳しい生活の中での“感動しながら生きること”についての話をしたあと、つぎのやりとりで終わる。

C54 私も最初のうちはね、あの哲学の本を送ったり、経済学の本を送ったり、してね。(ウム) あの「勉強してくれ」っていったんだけどね、(ウム) あの、何ていうかな、自分の考え方をとって押しつけようとしていたんだけどね (エエ) だんだん一寸変わってきてね (ハイ) あの、自分がいまね、身につけたね (ウム) 考え方や生き方っていうものを変えられないように、(ウム) ね、(ウム) 無理に人から変えろっていわれたらつらいように (ハイ、ハイ) あの彼だって、いくら私を愛しているからって、自分も持っているね (ウム) あの考え方をね、180度変えるっていうことはできないし、変えなくてね (エエ) そうだと思ふのね (エエ) ただ愛しているから、何でもかんでもその人のね (エエ) その言いままになるっていうのは、おかしいね (ナルホド) だからあの、私の方が間違っていたんだと思って (フム) でも、もっとそれよりも彼に、しごとを通してね (エエ) もっと、こう、会社でただ仕事をするだけでなく、写真の技術が、技術でね、(ハイ) もっとこう勉強する姿勢をもって (ハハハ) もっとあの写真を写すとき

でもね、あの一単なる何ていうかな (ウム) あの、写す、何ていうかな難しいんだけど (ウム、エエ) 「その際の、“感動”というものを」(ソーソー) その中にね (エエ) やっぱり彼自身の中にね (ウム) 彼自身の中に、「すっきりした思想というものを、それを写したときの気持ちというのがね、はっきりあらわれていないければね (ウム) いい写真はとれないんじゃないか」ってね、「あなたみたいに (ウム) もう怒ること、笑うこと、そういうことをね、(ハハハ) もう止めようって思って生きてる人にね (ナルホド) いい写真はとれない」し、あの「現像したって、いい現像はできないよ」って (ナルホド) いったらね (エエ) そしたらね、それは一番わかってくれたみたい 《目を輝かして》

T55 あー、そう、ハイ。ハイ。やっぱり写すときの、こう瞬間をとらえる、ね、気魄みたいなものとか、(ウンソウ) ね、こう感動みたいなものどうしてもこうもろに出ちゃうしね (ウン) そう、それは判ってくれたの?

C55 はい 《とても明るい》先生、もう、《笑い出して》私、

T56 時間きちゃいましたね。《2人で高笑い》

C56 先生、もう私ね、《「すっかりおかげさまで元気になったし、ここでおしまいにしたい」……》

面接終了後、クライアントはすっかり元気になり、自分でやっていけそうだと表明する。そして2週間後(2月26日)にもう一度だけ会うことを相互に了解して別れる。

2月26日から3月21日にかけての経過の概要：2週間おきの面接を予定していたが、東京への就職が大詰めになっては、年齢のせいでダメになる。本人からも「状況がひらけ次第報告の手紙を出す」との手紙、電話があった。当方も、了解した旨、手紙を出す。就職探しの労のねぎらい、次への出発を祈るという内容。

3月21日 ハガキを受理。「一番希望していた就職先(東京某学校)に決まった。25名の中から選ばれた。夢のようだ。安心してほしい。職場では誠実に頑張りたい。またゆっくり便りする」旨の礼状がくる。手紙には、東京での新住所も記してあった。当方も100%面接終結の確信をすることができた。

IV 考 察

ここでは、主として目的③を中心に、結果を以下の3点から総合的に考察し、今後の治療実践における夢の表明とその受けとめへの手がかりや示唆を提起したい。

1. 治療状況での話題としての夢への手がかり

夢は、本研究で検討した事例1と事例2に関していえば、クライアントが治療状況における“自由な話題”のなかから、全く自発的に表明したものであり、いわば全く思いがけない夢話題との出くわしのようである。

しかし、よく検討してみると、事例1では初回面接のC7で「一寸まあ関係ない話になりますけど『夢判断』って本で、色々夢判断すると、きまって家庭内とか、欲求不満とか、怖れとか、そういったものがでてくるわけですよ」と述べられている。そしてT8ではC7発言を受けて、「『夢判断』って、本で読まれているわけね。何か夢ごらんになります？」と応答している。事例2では、4回目面接のT7「そういう（親への）気持、さびしいにはさびしいけどやっぱり自分はそれでいいんだってサバサバした気持ちにもなれて行きつつある」と応答したことに對して、C7「でもね、先週ね、あの3つ夢を見たのね。……」と発言している。そして治療者のうなづき「ハーンハン」に応じて、つぎつぎとその夢の内容——①大阪の家へ帰るのに最終電車に乗り遅れる夢、②実習にいった施設の子どもの夢、③施設の男の子と恋愛に陥り、義理と人情に迷う夢——を表明し、T8で応答している。

この2例だけに限っていえば、クライアントは、すでに来談時から夢表出への素地をもち、暗々裡に展開していたと考えられる。すなわち、事例1では主訴で「家庭での両親の不仲にさらされていること」はC7で表明されてくるし、事例2では主訴での「小さい頃からの両親との関係」「付き合いのあった男性との関係」は4回目面接C7で表明されてくるわけである。

また家族構成や家族内人間関係からも、両事例とも共通の特徴を呈している。それは“両親が不仲であること”といずれのクライアントにも主観的に体験されていることである。いずれのクライアントも、いわば家庭内人間関係、とりわけ親—子関係において葛藤や確執にさらされている。そしてこのことをつきつめると、両事例とも父親と母親との間の不和にたどりつくことができる。いかにすれば親自身が家族の中で“安定した夫婦関係”でないことである。このいずれの場合にも、父親が家庭外に“女性”との関係をいくつかもっていたことである。このことが家庭内人間関係を暗くて重いものにし、ひいては子であるクライアントに暗くて重い影を投げかけている。また兄弟・姉妹関係でいえば、事例1では“ひとりっ子”であり、親に依存的に頼られているし、事例2では兄と弟にはさまれた女の子であり、いってみれば女の子だけでいえば“ひとりっ子”である。この兄弟構成における親が子に与える圧迫感や心理的負荷、家族における“雰囲気障害”（霜山、1973）は十分に想像しうるからである。

しかもこのような問題にクライアントが脅やかされ、傷つけられ、気にしはじめるのは、両事例とも学童期からであることも特徴的である。事例1では小学4年か6

年頃といい、事例2では子どもの頃、とりわけ小学5年頃といっている。子どもの側からすれば、親に依存感情や攻撃的な感情を向け、受けとめられる時期に十分充たされず、問題を内向化している。それが昂じて問題化し、事例1では自殺未遂、事例2では自殺念慮（朝起きたら死んでますように神さまに祈って寝ていた）、自殺企図（無知なために薬を一ビン飲んだり、土を食べたりしていた）、そして遂には高校卒業後に家出へと発展していった、と考えられる。

夢表明に関するもう一つの重要な手がかりになる話題は、クライアントの睡眠行動についてである。事例1では、夜ひとりで“ダニー・ボーイ”のレコードを巻き返し繰り返し聴きながら、さびしさの涙を流しているという状況であり、眠るのが苦痛であるという状況である。また他方では、自分は「いつまでも眠ってみたい」とも述べていることである。事例2では、小さい頃からの家の暗さ、バラバラな状態、両親の不和であることを思うと、「夜寝るときは、朝死んでますようにと祈って寝なきゃならなかった」（第2回目面接C12発言）と表明している。そして両親への憎しみ、怨み、非難をあげせることで、夜も“反発心”に燃え、目がさえてくることもしばしばであった。その反面、うわ言を言ったのではないかと、夜中にハッと目を醒ましてしまうという状況である。

このようにみえてくると、睡眠行動の観点からは、自己に脅えを感じ、不安定で、リズムカルでない心理的状況が伺える。これを基盤にして、REM睡眠期に、ポッカーりと“悪夢体験”が浮かび上がってくると考えられる。この点、筆者の前報（1976）の事例でも、状況は同じである。とりわけ、「夜眠るのが怖い」「夜寝るのがおっくうだ」「夜眠れない」「夜中にうわ言をいうらしい」といった話題表明は、夢、とりわけ問題化した夢への重要な手がかりになると考えてよからう。

以上をまとめると、治療状況での話題としての夢への手がかりは、「家庭内人間関係の葛藤や確執」と「睡眠行動の不安定さ」とが重複したものとして、明瞭に、あるいは暗々裡にクライアントに体験されつつあるものとして存在するといえよう。クライアントの存在が脅やかされ、生きるということが問題化してきているという、クライアントの心理内界や心理的状況を考えてみれば、このような夢への手がかりの存在は、自明のことといえらるであろう。

2. 治療状況におけるクライアントの体験過程

どのような治療状況も、クライアントの援助されたいという欲求によって成立する。本研究で用いた2事例に

おいてもく来談の契機<主訴>で記されたとおりである。そこにはそれぞれのクライアントのどうしようもない行きづまり体験、葛藤の体験がある。それを何とか克服しようとして、事例1では、クライアントは自ら『夢判断』を読みあさるが、自分のみる夢のことは載っていないから判らないと述べている。そして担任教師に援助を求めていった。事例2では、大学の心理学の講義で、精神分析学の話を書いたあと、その担当講師宅に電話をかけて、直接面談を依頼している。自らを何とか克服したい、乗り越えたいので援助してほしいというクライアントの切実な欲求が、本事例では円滑に治療状況への積極的な動機づけをなしていることは確実である。

ところで治療状況そのものの特徴としては、夢者その人の内的体験・感情体験の過程が重視されているかどうかである。夢が表明されると、治療者は、すぐに夢自体に好奇心をさそわれ、夢の内容を知的に解釈したり、分析したがる。これは、治療者が陥る“落とし穴”であると思われる。あるいは治療者自身でも気づいていない、無意識の影を、クライアントの夢の中に投影してしまっている“幻想的逆転移”(illusory countertransference; Fordham, 1960)であるかもしれない。

夢の解釈や夢の分析を行わない来談者中心療法においては、クライアントの内的体験過程こそを重視する。つまり、心理療法の原則である“夢は、夢者をして語らしめよ”という基本的治療態度は貫かれるべきであると思われる。いたずらに夢を誘い出そうとしても出せるものではないし、出るものでもない。重要なのは、目の前にいるクライアントが、夢以外の話題をも含めたかたちで自己を表明し、その場で刻々と体験しつつある情緒的、感情的体験にこそ注目しなければならないといえよう。そのようなクライアントの体験過程を、共体験しつつある治療者の体験過程が問われていくのである。

治療者が体験しうる、このようなクライアントの体験過程との“共振れ”“共鳴”こそ、クライアントの内的展開や問題への焦点づけ(focusing; Gendlin 1964, 1973)へと発展していく。特に事例2にみられるように、クライアント自身が自らの治療における克服課題として、“愛”と“性”のテーマ、“家”と“甘え”のテーマを設定し、焦点づけていったことは注目に値しよう。そして治療者に、たとえば「すごく、夢の中で苦しんでいる夢を見てね(T:ウーム)なんか、すごくおかしいなって思ったん(T:ウーム、ふしぎね)うーん」と伝達したり、「……何か変な夢ばかりみてるの」と低いつぶやくような声で伝達したりしている。このような過程で、治療者はその不思議さをクライアントと共体験し、変な感じを共体験しているかどうか、治療関係における

両者の重要な相互作用であり、ひいてはクライアントの焦点づけを促進させ、より深い自己探究へと発展させられることと思われる。岸田(1976)のいう「体験的応答」は、この共体験を通じて、あるいはこの共体験のさなかで行なわれると考えられる。

このような夢体験の表明を含めた共体験の成立の度合を確かめる手がかりとしては、声の抑揚や調子が両者でよく合致していること、喜怒哀楽といった表情がよく合致していること、対座している面接場面の姿勢のうつ向き加減さも一致することなどがある。要するに非言語的側面での動きが重要な判断手がかりにできるのである。

しかし、このような状況の雰囲気醸し出され、共体験が成立可能なのは、つぎに考察する治療者の基本的態度がよく吟味されているかどうかとも関連がある。

3. 治療者の積極的傾聴、体験的応答と内的 impact の高まり

事例1、事例2の治療者として、筆者は基本的には来談者中心療法における治療者の3つの態度条件(自己一致、無条件の積極的関心、共感的理解)で接しようとする努力をした。この点は、まじりつけのない誠実な気持、クライアントへの敬服の念、クライアントの健全さや可愛さの発見、共体験の成立の有無などによって把握できることである。このことは治療者の受けとめた<印象>の項で記されている。このような状況のなかで、クライアントの体験過程がより促進され、“過程”が生起すると考えている。

ところで、面接逐語記録にみられるように、筆者自身は夢者との接触において、つぎのような発言や応答の動きをしていることに気づく。

事例1では、初回面接でC67を受けてT68「何か夢ごらんになりますか?」と働きかけ、C68を受けてT69「色つきのみちゃう。ホウホウ。面白いね。私も夢に多少関心があるのだけれど、どんな夢みますか?」と働きかけている。そしてその連鎖反応としてC69の“はっとして目が醒める気持わるい、ほんとにイヤな夢”に出くわすことになっている。それに引続いたT71, T73, T75, T79, T80でも、クライアントの体験過程に即した応答で、クライアントを受けとめようとしている。T68, T69は、いまならもっとちがったかたちで、たとえば「夢ごらんになっているのね。どんな夢なのかしら?」と応答するであろう。また4回目面接では、クライアントは全体として一安堵の気持になり、逃げ道を見つけて、一すじの光が差し込んできた感じを伝えてきている状況を把握しながら、T45「気持の悪い疲れじゃないのね(ハイ)ウーム、ぐっすり眠れるみたい(ハイ) 一問8”一夢な

んかどうですか？」とクライアントを受けとめた治療者の問いかけをしている。そしてC45「イヤその悪夢はみません（ウムウム）まあこの頃、そんなに夢みなくなった（アソウ）…」との返答を得ている。そしてそのクライアントの現状を象徴化している“上の方に伸びている道、まわりの色が変わりつつあるところを、自分が歩いている夢”を得ている。この夢は、クライアントの現状での深淵からの体験過程を伝達するものとして、治療者にはとても気持ちよく聴けた。

事例2では、治療者はC7の夢3つの感情的色彩を受けて、T8「でも、こう夢の中で、……本当のなんか自分の、本当の気持ち、そういうのを見るような気がしたんじゃないですか？」と応答している。そしてT26で現実の就職の話題に応答し、夢の話に積極的に質問し、C26発言——“性愛”を感じた男性に関する夢——を通して重要な感情の表明に接している。そしてT28「ふしぎねえ。夢の中にまで繰り返えし巻きかえし出てくるのね」と応答している。ただし、クライアントのその男性に対する感情のとらえは、4回目の面接直後では、治療者には十分にできていなかった。‘2人の男性’をテーマにした話題は、ずっとその後もクライアントの夢以外の話題で暗々裡に‘気持ちの迷い’として表明されていた。

7回目の面接では、T39で長い沈黙（2分53秒）のあと「近頃は夢みるようなことない？」と再び積極的に質問し、C39の“おかしな夢”——家の奥座敷の12畳の間におかれているフロに彼を入れようとする夢——を得ている。ただこのあとの両者の相互作用の中で、治療者は共体験的応答よりも、やや解釈的応答をしている。T40はクライアントの体験過程には、ややかけはなれてしまっている。治療者は、奥座敷のフロということで、内容を解釈しようとした動きをしていたと思われる。

このあとで、事例2では、9回目面接で、クライアントも治療者もクリティカル・ポイント（Brammer & Sho-strom, 1968）に直面することになる。治療者も、このときはクライアントが自己異和感を訴え、絶望的になっている状況から、もしや自殺しやしないかという感じがしていた。しかしその状況でT15「心の病気には原因があるかって。Kさん、自分で病気だと思っているわけでもないでしょ。ボク、そう思っていないよ。」C15「でもね（ウム、ウム）」T16「いまね、気分がこううっとおしいような感じ、私には判るんだけど。《間》“病気だ”と、こう決めつけられない方がいいんじゃないの？」と思わず言ってしまうている。ここで面接時間が終わっているが、T17「……。来週も、私、ここにいますよ」とやさしく伝えている。クライアントが退室したあと、治療者はおいてきぼりを喰らった感じで、クライアントは以後

来室しなくなるかもしれない、と不安になっていた。

しかしそのあと（10月18日）の手紙で、かすかなつながりが保てていること、しばらく“面接を休むこと”は必然であることなどを治療者は考えていた。このことはいま考えても、適切であったと考えることができる。T15、T16は治療者が、思わず言ってしまったことばで、いわば精一杯のことばであった。クライアントからの手紙に記されている「2つの自分の夢——むかしの自分を、今の自分がみている夢」は、クライアントの自己不一致感、過去の自己と現在の自己との統合化への動きを、そのまま表象している産みの苦しみの自己像であると考えられた。筆者は、ここでのやりとりが“治療機転”（笠原1967；渡辺1967）をもたらしていると考える。クライアントにとって立ち直りをギリギリのところまで促すところの治療者との治療関係のなかで、もっとも治療者が苦勞するところと思われる。“近づき”すぎてはいけない。“遠すぎ”てもいけない。距離の問題が考えられなければならない。

当方からの積極的な働きかけとして、クライアントに手紙の返信（10月23日）をすることで、この距離は一定に保ち得たと考えている。クライアントに深い関心と尊重を示している治療者という他者の存在が、治療機転をギリギリのところまでひき起しうるのである。現にこの手紙を受けとったあと、クライアントは新しい決意を表明する電話をかけてきている。東京にいる彼に、古い自分、醜い暗い自分をも伝達しようという決意に目醒めたのであった。このようなクリティカル・ポイントにおける電話や手紙でのやりとりは、面接以外のコミュニケーションとして有効であるということ念頭にしておくことは、決して無駄なことではないといえる。

そのあとは、比較的上昇傾向をたどり、治療過程はスムーズに展開していくことになった。相変わらず夢は家をテーマにしたものが表明されていく。そしてまた治療者もうすうすと、クライアントが両親と“邂逅”しうることを感じはじめていた。そして12回目の面接で、父親からの劇的な手紙の受理を表明し、とても話したい夢——ソバ屋に養女としてもらわれていった自分がオバサンに真実の気持ちを打ち明けられる夢——をうれしそうに表明する。そして現実の母親——無口で自分を表現しない母親——は、自分の唯一人の母親であることを洞察するに至る。T27、T28、T29、T30で、治療者も真実の気持ちをクライアントに素直に伝達している。

治療過程の後半の動きからは、クライアントは現実的行動として両親へのわびを入れ、就職や結婚を東京にすることを両親に伝えて了承を得ていく。そして就職運動へと時間を注いでいくことになり、希望していたところに25名の中から選ばれて就職していった。クライアント

は夢のようだと語っている。親との確執・葛藤を夢から気づき、現実には“和解”することができる、クライアントはまるでち切れんばかりのリンゴの色をしたような顔の表情、目の輝きをとりもどすことができるようになった。気分の浮き沈みもなくなり、自分が自分であるという持続的一貫性のある感覚を獲得することができるようになったのである。自我同一性の獲得である。

面接の事実上最終回に、治療者がクライアントのこれまで焦点づけて表明した夢話題は、T²⁹ → C²⁹ → T³⁰ で質問されていった。クライアントは、C³⁰での発言で示されているように、「ふつうの夢はみるけれど、起きてから、ジーンと考え込むような夢はみない」と伝えている。

治療者としては、この回に表明されたクライアントの治療終結の意思を尊重して、事後のケアとしてもう二回の面接を積極的に提案したが、事実上クライアントは就職運動のために、来室できなかつた。3月21日のクライアントからの一通のハガキが来て、治療者も、文字通り終結してよいと確信できた。

以上、要するに、本項では治療者の側で重要な動きや働きかけとして、クライアントの治療過程での心理的状況を十分にとらえるなかで、その瞬間々々、その回ごとの、クライアントの体験過程を、治療者の体験過程に照合したり、とり入れたりしながら、ときには積極的に質問してみたり、積極的に感情を確かめたり、そしてときには電話をかけたり、手紙を出すことによって“体験的応答”（岸田、1976）を伝達することが不可欠であるといえよう。このような応答がクライアントに伝達される際の治療者は、内的impactが十分に高まっているときであろうことが強調されるのである。

V 要 約

カウンセリングや心理療法の場面において、まま出くわす事象にクライアントの夢がある。本研究の目的は来談者中心療法の文脈で夢が治療者－クライアントの治療関係の中で、どのように両者の体験過程に定位づけられるかを事例的に検討すること。夢が表象される状況と他の話題が表明される状況との関連を記述しながら、全体の治療過程の流れを一つのまとまりとして考察すること。さらに治療者－クライアントの治療関係の質を、いくつかの観点から総合的に考察し、今後の治療実践への手がかりや示唆を提供すること、などであった。用いられた事例は2例であった。それぞれ5回、15回の治療的面接が行なわれ、終結しているものであった。

結果は、来談契機、主訴、治療開始前の治療者の体験過程、治療面接経過、各回の治療者の印象、夢の表明に

関して記述された。そして夢は、治療過程の全体の展開と密接な関係にあることがわかった。

それらの結果は、1. 治療状況での話題としての夢への手がかり、2. クライアントの体験過程、3. 治療者の積極的傾聴、体験的応答と内的 impact の高まり、に関して考察され、来談者中心療法における夢の問題についていくつかの示唆が提供された。

<付記> 本論文の作成にあたり、文献等の資料整理に、研究補佐員の稲垣京子さん、研究生の日比野敬子さんならびに松尾真由美さんに、多大な協力を得ました。記して感謝の意を表します。

文 献

- Brammer, L. M., & Shostrom, E. L. 1968 (rev. ed.) *Therapeutic Psychology; Fundamentals of Counseling and Psychotherapy*. Englewood Cliffs, N. J., Prentice-Hall, Inc. (邦訳 ブラマー, L. M.・ショストローム, E. L. 対馬 忠・岨中達訳 1969 治療心理学 誠信書房)
- Fordham, M. 1960 Countertransference. *Brit. J. Med. Psychol.*, 33, 1-8.
- Freud, S. 1900 *Die Traumdeutung. in Gesammelte Werke, Bd. II-III, London-Ausgabe.* (邦訳 フロイド, S. 高橋義孝訳 1955 (15版) フロイド選集第11巻 夢判断く上>; 1954 (8版) 第12巻 夢判断く下> 日本教文社)
- 藤原勝紀 1976 象徴的減感法の治療方法的意義——三角形イメージ課題によるある臨床的現象をめぐって。九州大学教養部「テオリア」第19号, 85-110.
- Gendlin, E. T. 1964 A theory of personality change. (In Worchel, P. & Byrne, D. (eds.) *Personality Change*. New York: John Wiley & Sons., Pp. 100-148.)
- Gendlin, E. T. 1973 Experiential psychotherapy. (In Corsini, R. (ed.) *Current Psychotherapies*. F. E. Peacock Publishers, Inc., Pp. 317-352.)
- 笠原 嘉 1967 精神療法一般の治癒機転についての一考察 *精神医学*, 9 (4), 273-277.
- 河合隼雄 1967 ユング派の分析における技法と理論〔特集〕精神療法の技法と理論 とくに人間関係と治癒像をめぐって——*精神医学*, 9 (7), 24-28.
- 河合隼雄 1971 夢の中の分身体験について *日本心理学会第35回大会発表論文集* P. 677.
- 河合隼雄 1974 夢分析の理論と臨床——ユング派の立場から—— *日本心理学会第38回大会発表論文集* Pp. 153-154.

- 河合隼雄 1975a 夢内容に関する数量的研究 日本心理学会第39回大会発表論文集 P. 494.
- 河合隼雄 1975b 自我・羞恥・恐怖——対人恐怖症の世界から—— 思想, 5月号 (No. 611), 76-91.
- 河合隼雄 1976 影の現象学 思索社
- 岸田 博 1976 体験的応答の効果に関する基本的一考察 相談学研究, 9 (1・2), 19-29.
- 前田小三郎・林輝明・滝あづさ 1976 背髄損傷者の夢における身体像の変化について 日本心理学会第40回大会発表論文集 Pp. 1047-1048.
- 前田重治 1974 フロイト派の理論と臨床 日本心理学会第38回大会発表論文集 Pp. 155-156.
- 増井武士 1975 夢と催眠心像を素材にした一つの精神療法の試み——Hystero Neuanze が強く認められた一事例について 九州大学教育学部紀要 (教育心理学部門) 第20巻 (1), 27-34.
- 水島恵一 1974 夢分析の理論と臨床 日本心理学会第38回大会発表論文集 Pp. 159-160.
- 門前 進 1976 治療プロセスにおける治療者の問題点——登校拒否を示した女子高校生の症例から——九州大学教育学部心理教育相談室紀要, 2, 47-56.
- 村山正治 1977 来談者中心療法の最新の動向 (田畑治・村山正治編 講座心理療法第1巻『来談者中心療法』福村出版, Pp. 182-191.
- 西村洲衛男 1975 人格の発達と家族内の世代の交代 日本心理学会第39回大会発表論文集 P. 506.
- 西村洲衛男 1974 夢告と夢分析に関する若干の考察 中京大学文学部紀要, 9 (1), 17-37.
- 西村洲衛男 1976 夢分析の研究——アニメ像の変容過程について—— 日本心理学会第40回大会発表論文集 Pp. 1049-1050.
- 荻野恒一 1974 現存在分析の理論と臨床 日本心理学会第38回大会発表論文集, Pp. 157-158.
- 小椋たみ子 1976 心理治療における象徴過程の意義についての検討——描画と対面連想法による心理治療でのクライアントの表象する夢の治療的意義 奈良女子大学文学部研究年報, 第19号, 55-85.
- 大熊 輝雄 1975 夢 (加藤正明他編 『精神医学事典』 弘文堂, P. 653.)
- 大熊輝雄・織田尚生 1971 精神医学領域における睡眠および夢の精神生理学的研究——夢の縦断的研究を中心に——。精神医学, 13 (10), 97-106.
- 霜山徳爾 1973 家族の病理 (滝沢清人・相場均・南博編 『現代人の病理』 第3巻 『家族の臨床社会心理学』 誠信書房, 23-39.
- Singer, E. 1970 *Key Concepts in Psychotherapy*. Basic Books, Inc., (邦訳 鐘幹八郎・丸藤太郎訳編 1976 心理療法の鍵概念 誠信書房)
- 住本吉章 1976 夢をとおしてみた登校拒否の治療過程 日本心理学会第40回発表論文集, Pp. 1051-1052.
- 田畑 治 1975 不安神経症者の心理治療過程と治療的人格変化 日本心理学会第39回大会発表論文集, P. 475.
- 田畑 治 1976a 一不安神経症青年の心理治療過程と治療的人格変化 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 23, 85-113.
- 田畑 治 1976b 成人女性カウンセリングの方法論的考察 (1)——問題の所在と事例の探索——。日本心理学会第40回発表論文集, Pp. 1091-1092..
- 鐘 幹八郎 1968 夢の臨床的利用に関する考察 (第一報)——夢の形成作業に関する精神分析学的仮説の検討—— 大阪教育大学紀要, 第17巻, 155-161.
- 鐘 幹八郎 1970a 夢分析とその理論 日本心理学会第34回大会発表論文集, P. 43.
- 鐘 幹八郎 1970b 心理療法における夢分析の機能。夢の臨床的利用に関する研究 (第2報) 大阪教育大学紀要, 第19巻, 147-154.
- 鐘 幹八郎 1971 夢および夢みに関する研究への若干の考察 広島大学教育学部紀要 (第一部), 第20号, 267-281.
- 鐘 幹八郎 1973 夢, 神話等における蛇のイメージ。情動表現の臨床心理学的考察 広島大学教育学部紀要 (第一部) 22, 267-282.
- 鐘 幹八郎 1974 夢分析の理論と臨床——問題の提起および資料の提供—— 日本心理学会第38回大会発表論文集, Pp. 151-152.
- 鐘 幹八郎 1976 夢分析入門 創元社
- 渡辺久雄 1967 精神療法における治癒機転に関する一考察 精神医学, 9, 243-247.

A CONSIDERATION ON THE DREAM IN THE CLIENT-CENTERED THERAPY

Osamu TABATA

In counseling and psychotherapy situation, clients often report their dreams. The purpose of this study was, firstly, to explore how the client expressed and orientated his or her dreams into their experiences, in which the therapist and the client interacted in the context of the client-centered therapy; secondly, to consider the therapeutic processes as a whole in comparing the situation when the dreams are reported with the situation when the other verbalisms are expressed; and thirdly, to discuss with the quality of the psychotherapy relationship between the therapist and the client, and to present some suggestions for further practice in psychotherapy. The cases used in this study were two clients; the one terminated after 5 interviews, and the other 15 interviews.

The results were described about the motives for therapy, the complaints, the therapist's pre-therapy experiences, the therapeutic processes, the impressions of the therapist at each interview sessions, and the expressions of the dreams. The consistent relationship was seen between the dream and the whole development of the therapy process.

These results were discussed on the following points;

- 1) The cues to dream expression in the therapy situations.
- 2) The client's experiencing in the relationship.
- 3) The therapist's active listening, experiential response and high internal impact in the relationship.

From these discussions, some suggestions were presented concerning on the problems of dreams in the context of the client-centered therapy.